

明治四十一年六月二十四日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第五拾貳號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第五拾貳號目次

論 說

- 明代の文僧……………赤井直好
- 超悲觀論……………高木生

文 苑

- はしか……………福田風前
- 生……………羊角生
- 桐の實……………江南文三
- 瓢零……………寛竹花
- 鴨足草……………江南白雪
- 「えせもの」……………山田轟風
- 四高俳句會……………

雜 報

- 落うなぎ……………美島
- 新寮の落成……………
- 中堅會……………
- 退壇の辭……………
- 音樂の價値……………築瀬成一

部 報

- 北辰會音樂會第一回演奏會評……………
- 野球團南下の記……………
- 一中と本校との試合……………

附 録

- 經驗と思惟及意思……………教授 西田幾多郎

北辰會雜誌第五拾貳號

論 說

明代の文僧

四、愍山大師

赤井直好

大師諱は徳清、字は澄印、愍山と號す、姓は蔡氏、父諱は彦高、母は洪氏、和州の人、明の嘉靖二十五年丙午十月十二日を以て生る、年十二、始て西林の無極和尚に従ひて、佛戒を受く、長するに及びて、刻志參究、深く佛旨を求め、頗る得る所あり、燕盤山に入て住むこと月餘、五臺に住すること八年、次に東海の牢山に住す、後方士の流言に因て獄に下り、遂に雷陽に謫戍せられ、力めて曹谿の祖庭を清む、晩に赦されて南嶽に歸り、次に匡山の五乳峯に住して念佛し、後復曹谿に住し、天啓三年十月十一日を以て逝く、享年七十有八、著はす所、楞嚴通義、法華通義、楞伽記、圓覺解、金剛決疑、中庸直指、老子道德經解、莊子内篇註等頗る多く、就中夢遊集五十卷は、大師の雜著及び詩文を収録したるもの、其文藻を見むと欲せば此書に據らざるべからず、以上は大師が略傳のみ、其詳細に至りては、會稽の陸夢龍が撰せし所の傳、及び自叙年譜二卷、

自贊三十三首、共に載せて夢遊全集中にあり、頗る其平生を悉くすに足る、大師は實に彼の紫柏老人と共に明末に於ける禪門の巨擘たり、錢謙益其夢遊全集に序して曰く、

昔人嘆す、中峰席を輟めて、道何方に隠れしかを知らずと、又いふ楚石季潭以後、拈花一枝幾と熄むと、是に由りて之を觀れば、紫柏憨山に歸せずして誰れにか歸せむ、

と、謙益其人固稱するに足らずといへども、其言は則ち取るべきものあり、藕益大師年二十四の時、一夜大師を夢み、因て益其盛徳を仰慕し、往て之に従はむと欲し、も、大師遠く曹谿にありしを以て、乃ち大師が弟子雪嶺師に師事したりといふ、亦以て其徳操のいかに高かりしかを推知するに足らむ、

大師が儒佛道三教に對する見解は、亦雲棲大師と同じく、三教は本來深淺遠近の別こそあれ、其本体に至りては同一なりといふにあり、故に五乘を以て之を較論すれば、孔子は人乗の聖にして老子は天乗の聖なり、聲聞緣覺は超人天の聖にして菩薩は超二乗の聖なり、而して佛は則ち超聖風の聖なりといふべきも、此れ其跡を以ていへるのみ、其心に至りては本末同しからざるはなしとなせり、蓋しよく此主旨を論せしものは、大師か觀老住影響論一名三教源流異同論なりとす、

大師が文は、疎豪雄健、之を圓菴に比すれば、其縱橫揮灑せるところ、却て健鶻空を搏ち、一擧千里なるものあるを見る、錢謙益の評に曰く

大師は紫柏尊者と、皆英雄不世出の資を以て、獅絃絕響の候に當りて、身を捨て、法の爲にし、一車の兩輪たり、紫柏の文は、雄健にして斬截、大師の文は、紆餘にして悲婉、其昏塗の炬火たるは則ち一なり、

と、紫柏の文を以て、雄健にして斬截となせるは則ち中れり、大師の文を以て、紆餘にして悲婉となせるは則ち未だ其當を見ず、紫柏の文其至れるものは、鐵槌を以て之を鍛鍊したるの概あり、大師の文之に比せば、或は煩肆を免れずといへども、虚心之を論するときは、其文の疎豪奇健、縱橫無礙なるどころ、眞に當るべからざるものあり、藕益大師か憨山大師贊中に氣宇似王者、筆陣若江濤といへるもの洵に其然るを見る、而も間々交ゆるに險澁の聲調を以てするところ、宋文にわらず、明文にあらず、寧ろ清文の先驅をなすもの、如し、唯大師か文に於ける、固緒餘に屬するを以て、文に臨て敢て意を経せず、從て古文の步趨を踏まず、雅俗混殺、頗る語録躰をなせるもの多く、純然たる古文を以て律すべからざるものあり、則ち余等が其文品を評騭するが如き却て大師の累たらずんばあらざるなり、

五、藕益大師

大師俗姓は鍾、名は際明、一名は聲、字は振之、八不道人と號す、蓋し古は儒禪律教あり、大師既に蹙然として敢てせず、今亦儒禪律教あり、大師又蹙然として屑しとせず、故に八不と號すといふ、古吳木瀆の人、萬曆二十七年己亥五月三日を以て生る、十二歳、外傳に就き、聖學を聞て、千古自ら任し、論數十篇を作て、異端を闢く、十七歳、雲棲大師か自知録序及び竹窓隨筆を閱して、乃ち佛を誘らず、さきの關論を取て悉く之を焚く、二十四歳、夢に憨山大師を禮するこ

と、一月中に三たび、因て景慕措く能はず、乃ち大師の弟子雪嶺師に従ひて剃度し、名を智旭と命ず、三十二歳、四闡を作て佛に問ふ、一に曰く賢首を宗とせんか、二に曰く天台を宗とせんか、三に曰く慈恩を宗とせんか、四に曰く自ら宗を立てんかと、頻に台宗の闡を拈得せしかば、乃ち心を台部に究む、而も台家の子孫たるを肯せず、蓋し近世の台家は、禪宗賢首慈恩と、各門庭を執し、和合すること能はざればなり、三十五歳以後、諸種の經疏四十余种を述ぶ、其外典に關するものには、周易禪解、四書藕益解、儒釋宗傳竊議等あり、宗論十卷は、其雜著及び詩文を收めしもの、大師の文章如何は此書に見ば明かなり、五十七歳、春正月二十一日を以て逝く、實に清の世祖の順治十二年なり、平生嘗て言へるあり、曰く、漢宋の註疏盛にして聖賢の心法晦く、隨機羯磨出て、律學衰へ、指月錄盛に行はれて禪道壞れ、四教儀流傳して、台宗昧しと、大師が若きは、能く三學を貫徹し、頽流を力振せしもの、八不を以て號となすこと良に以ありといふべし、大師は夙に愍山大師を景慕し、其教觀を傳へしも、愍翁既に老莊の諸解あり、大師が周易及び四書を解釋せしもの、其聖學に通せしに由るべけれども、亦愍翁の三教融合觀に本づくものたらすんばあらず、かの一部宗論を讀むも、宋明理學を談するところ頗る多きものは、亦是れか爲ならむか、

大師の學は已に博涉なり、其行も亦嚴峻なり、故に其發して文章となれるもの、亦高明博大ならずんばあらず、大師自ら此間の消息を述べて曰く、

出格の見地ありて方に千古の品格あり、千古の品格ありて方に超方の學問あり、超方の學問あ

りて方に蓋世の文章あり、今や文章學問、品格を立つるより始めず、品格も見地を開くより始めざるは、是れ楚に之くに其轅を北にするものなり、

と、故に文章事業をして一以て之を貫かしむるには、須らく見地を洞開せざるべからず、見地を洞開するには、文の最なるものを知り、此を以て厚く自ら期待するにあり、文最とは何ぞや、曰く、出世の文は迦文を最となし、治世の文は文宣を最となす、迦文は身を捨て、半偈を得むことを求め、文宣は難に遇ひて文王既に没すれども文茲に在らざるかといへり、此れ皆文に於て其最を知るものなり、

と、誠によく理を以て情を奪ひ性を以て習を矯め、自心を求めて、聖學の旨に合せば、區々文章豈言ふに足らむや、

紫柏愍山の諸老は、夙に世の徒に不立文字に執して、無聞の禍に墮するを歎し、此か弊を救はむと欲して、自ら文字を立つるにあらざれども、其間苦心慘憺たるものありき、大師も亦此間に處して、多大の心力を勞せしもの、而も此風既に盛にして道却て衰ふるものあるを見て、敢て文を以て世を炫せむとせず、其著作頗る多く、蔚然一大著作家なりといへども、所謂文家の文をなさず、寧ろ註家の文の如く、暢達明瞭、紆餘多致なるどころあり、且つ佛語を驅使すること甚多きを以て、經典を讀むが如き感なきにしもあらず、此れ大師の本意の存するところにして、其文の貴き所以も亦此に存するならむも、其文格は則ち明文の範圍を出てざるものに似たり、

六、鼓山大師

大師姓は蔡氏、建陽の人、明の萬曆六年七月十九日を以て生る、少うして儒を業とし大志あり、年二十五、書を山寺中に讀み、寺僧の法華經に我れ爾時爲に清淨光明身を現すといへるを誦するを聞き、自ら欣躍措かず、喟然として嘆して曰く、周孔以外果して別に一大事ありと、是れより意を教乘に留め、經論に貫通するに至れり、之を久しうして、壽昌無明利尙の提唱を聞き、茫然自失し、盡く習ひしところを棄て、參禪す、かくて年四十に至り、竟に壽昌に従ひて落髮し、師遷化の後、同門無異禪師に従ふこと三載、辭して閩に歸らむとして、劍津を過きりし時、機に觸れて廓然大悟す、五十七歳、鼓山の請に應じて留ること二年、去て法を泉の開元、杭の眞寂、延の寶善に開き、後復鼓山に歸り、重ねて寺宇を建て、大に宗風を闡く、海内皆尊ひて古佛といへり、清の順治十四年十月七日を以て逝く、世壽八十、三會語及諸撰述、凡そ二十種計八十餘卷、並に世に盛行すといふ、

大師は本儒家なり、自ら七十子の下風に立つを肯んせず、嘗て詩を賦して曰く、

道徳師顔閔、文學宗游夏、其餘二三子、不願在其下、

と、中年儒を棄て、佛に歸し、遂に一世の宿徳となれり、故に其儒釋を論するや、亦前陳諸老の如く、其根本は遂に一元に歸するものとなして曰く、

儒釋源を同うす、太虚の疆界を分たざるに似たり、素緇軌を異にすれども、一臂の自ら屈伸あるが如し、之に達すれば一道齊しく平に、之に味ければ千差競ひ起る、苟も智鑰にあらざれば、曷ぞ迷關を啓かむや、

と、彼の儒を以て佛を誹り、佛を以て儒を誘るものは、皆事理を解せざるもののみ、故に文藝に於ても、亦徒らに不立文字の故を以て之を排すべからざるものあり、大師が文藝を論せし言に曰く、

嗚呼吾れ藝文を志すに於て、不朽の難を嘆するものなり、世書に不朽と稱するもの三、立言其一に居る、夫れ言固傳ふべし、言にして不文なれば則ち傳はらず

と、故に大師が文に於ける他の諸老が文を以て糟粕となし、猥に俗語を挿入するに反し、純然たる雅語を以てし、勉めて古文の正脈を奉すること、圓菴老師其人の若きものあり、蓋し圓菴老師は、本釋氏にして勉めて儒家の文を遣らむと欲するもの、反之鼓山大師は、本儒家にして専ら釋氏の文を作らむと欲するもの、故に大師の文は、佛家の言なれども、敢て多く佛語を驅使せず、却て諄然たる儒家の口吻をなせり、明の陳瑄、大師が禪餘外集に叙して曰く、

余何を能く大師を知らむや、茅其文を讀むのみ、其才情に馳騁せずして、而も實は才情に富む者にあらざれば至る能はず、問學に組織せず、而も實は問學に深き者にあらざれば道ふ能はず、直春工化普うして、迹の尋ぬべきなきか如く、亦白雪調高うして、耳に聽き難きものあるが如きを見る、且つ余毎に其下筆疾書を見るに、千言立るに就り、痛快醇至ならざるなく、微顯闡幽に至ては、今古敢て開かざるの口を開き、而も皆之を出すに平易和雅を以てし、艱險綺麗の習なし、所謂徳性の文にあらざるか、

と、大師の文を以て才情問學徳性の三を兼ねとす、或は然らむ、蓋し大師が文、醇茂の中に妙

悟あり、時に薑桂の辛辣なる舌を及し、喉を棘すが如きものあるを見る、然れども又往々對偶駢儷以て聲調を整ふるところなきにあらざる、是れ遂に圓菴老師に一着を輸する所以ならむか、

余は以上六師に就て、畧其文藻を品題し、明代に於ける縉流の文學いかむを述べたり、而して其我國に來りしものに至りては、之を他日に俟たんと欲す、顧に朱明三百年、其文運斐然として起りし所以のものは、太祖實に之を開きしなり、而して其佛教の盛なりし所以のものも、亦太祖が素禪僧たりし故を以て、縉流を保護し、之を優遇したるに由らずんばならず、故に一方に於て文儒彬彬々として輩出せしと共に、他方に於て名僧知識の出づるありて、宗風を顯揚せしこと少なからず、かの念佛に於ける雲棲、禪に於ける慈山、天台に於ける藕益の若き、明代に於ける三傑と稱せられ、其感化の及びしところ、又洵に尠少なからざるものありき、

且有明一代を通して佛教界に行はれし思想の潮流は、諸教融合の傾向にして、獨佛教内に於ける禪教念佛の融合のみならず、儒佛二教の合同より延て儒佛道三教の融合一致を唱道するにあり、故に前來陳べ來りたる諸師は皆此等の思想を有せざるはなく、從て儒教を講し老莊を究めしを以て、徒らに枯淡空疎の弊に陥るなく、文藝の圃に遊ひ翰墨の場に携はるに至りしは、固其所なりとす、

之を要するに、釋氏の文は概ね清高雋逸、迥然人より高きものあり、是れ古文學史中にありて、特に一異彩を放つ所以にして、之を現代に行ひて風を正し俗を矯むるもの、蓋し多からむも、世曾て其文をいふものなかりしを以て、徒に蠹蝕鼠殘の間に埋められ、古人の精神を併せて之を澆

滅に歸せんとするに至りしは、夙に識者の遺憾とせしところ、是れ余が聊か諸師の文を品題せし所以なりとす、若し夫れ其評騭の正鵠を失して 諸師の盛徳を累し、が如きは、一に余か不才の致すところ、諸師の宏量なる固より其罪を問はざるべく、今は只大方の寛恕を乞ふにあるのみ、

(完)

超 悲 觀 論

高 木 生

夏の日永の徒然なるまゝに一日蛆蟲相會して演說會を開催せり見るからにうちくと心持よく肥わたるが起ちて語れり「愚なる哉人類彼等は四六時中孜孜營々として日も之れ足らざる如くその業を勵めり是れその胃を愛し三寸の舌を尊とぶに因るなり而してその胃とは何ぞや我等蛆の爲に精選せる滋養分を供せんとてそを製する器械に非ずや、かくて彼等の一生は連續せる製糞の歴史なり我等蛆に對する献身犠牲の歴史なり然も自ら宣すらく人は万物の靈長なりと此に於てか我等蛆たるもの億物の靈長とや云はん」吁蛆蟲をして此の如き厚顔不遜の言を吐かしむるは何ぞや唯その以て立つ所依つて見る所異なれば也。

汝の立脚地を代へよ然らば世界は一變せん、

世に悲觀論者なる者あり彼等は事々に慷慨するを以て義人とし物々に白眼視去るを以て高潔と

なす曰く「今や世は人情輕薄に赴き將に塵紙に劣らんとし奢侈日々その勢を得人々文弱に流れ剛健の風地を拂つて復昔日の躰なし彼等の肉躰は自然力に抗するの力なく足の裏は皮膚薄くして洗足に耐えずして穿くに靴を以てし胃は固形物の消化力なくして代ふるに牛の兒の飲む牛乳を以てす日光に敵せずして被むるにハットを用ゆ、知らずや常に靴を穿たば支那婦人の如く足趾の退化を招くを常に流動躰に慣れたる口は齒を退化絶滅に歸するを而して又見よハットを以て絶わす蒸す頭は遂に禿するに至るも遠き將來にあらざるべし見すや泰西人の多數は既にその古孔子の初めて立てる三十にして頭禿せるを、砂糖は高くなり世智は鹹くなる而も元老は維新の功臣に劣る噫濁れる哉澆季の世我何處に往くべきか」と世しかく悲觀すべきか、若し然か信せば彼等をして宜しく二荒山巖頭水烟の如き所に立たしめよ必ずや反思一番得る所あらん。

シヨッペンハウエルは一代の哲人なり深く佛教的厭世に歸依して煩惱を罪惡視せし人「此の憂世にありて人間の爲し得る徳義は只愛憐のみ」と言へり而して聞く彼や常人に比して肯て劣らざるの吝嗇家たりきと生を捨て世を厭ふ餘の紛々たる妻子珍寶何物をか惜まむ然かも彼や何物をも吝めり之れ憐れむべき滑稽に非ざるか、

人は天性生を好み到底死と調和し得ざる或物を有す否永遠に生くる靈力を有す百の解脫哲學を以てしても遂に滅却する能はざるなり。

之に反して世に樂天論者なる者あり彼等や酒來れば酒を飲み餅あらば餅を取る曰く善哉くど彼等が與物爲春自ら變じて些の凝滞なき所聖人に似たるも内に何等の主義なく識見なく浮草的生

活を送り官に出で、はお髭の塵を拂ひ内に入つては細君の臂下に伏す風來れば共に飛ぶ秕糠に外ならず曰く「奢侈盛んにして職業益々多く職業益々多くして道に餓ゆる者なく野に俯する者なし太平此の如くして望むべく安寧此に依りて保つべし硝子を破るが故に硝子商は繁昌し車に乗るか故に車夫其の細き烟を立て得るなり誰か之を奢侈と言ひ柔弱と言ふ是れをしも一大慈悲心と云はずして又何をか云はん、笑ふべし徒步會員憐むべし禁酒會員租税の高きを以て國家の發達を目指すべく砂糖の消費多くしてその文明なるを知るべし通行税のあるあり以て如何に交通の繁榮なるかを誇るに足る世は進化せり進化するものなり吾人何をか憂ひ何をか痛まん」諺に盜賊に三つの言ひ譯ありと云へり、若し求めて理窟を附せば凡ての事物にその理由あり吾人は樂天論者も厭世論者もその半面を吐露せし者と爲さん。

世界は廣く眞理の峯は多し若し物外を出で、その物を見峯上を越えてその峯を遠觀し來らば唯物論も唯心論も二元論も一元論も汎神論も一神論も樂天論も厭世論も共に半面の眞理を有し併して半面の存在權を有する物に非るか吾人の一浮も地球を離れず一沈も地上を脱せずかるが故に吾人は遠き日月星辰の形を知つて目前足下の地球の形を知る能はざるなりその三角といふも四角といふも意の如くして地球はその圓といはるゝも楕圓といはるゝも舊に依りてその形を改めず、世の多くの争や畢竟砂上の文字か。

他力信者は歸命頂禮合掌すらく「世界の大きなは吾人の思量を絶する底の無限に及び時の久しきは天地開剖して伊邪那岐命三柱のうづの御子を得玉ひしより尙は無限の古しへに始まる此間に

ありて人はたゞ束の間の夢を貪り運命の波の浚はるに任す所詮千万年走るとも能く大佛の鼻の穴をも通過し得ずなごかは之に逆はんとする、吾人の一身を托すべきは佛陀の御船あるのみ以て荒浪狂ふ煩惱の大海を渡航して彼岸淨土に達するを得ん、かくて西行は北面の武士を辭職せり繪の如き無官太夫が首を落せし熊谷次郎直實は殊勝氣に念佛口に蓮生坊と化せり彼等は慾の無限にして人力の限りあるを悟れり六慾を追うて走るの消れて後なき仇し野原の露なるを悟れり五十年の歲月の假世なるを悟り夢なるを悟れり、甚しきに至りては夢の中に夢と言ふも夢なりと悟れり夢を迷ひと云ふも夢なりと悟れり悟れりと言ふも夢なりと悟れり、嗚呼現世界して夢なるか。

自力信者は立てり我向ふ所アルプスの嶮なくゴビの難なし世界を夢と觀じ一切を空と觀ずるも、かく觀する「我」は茲に立てり、夢に非ず迷ひにあらず、世界の無限なる、他力信者の言ふが如し、されど、その無限なるか故に端なく中心なし各人凡てが中心にして「我」は宇宙の中心なり他の物ありて私の周圍を作る時は無窮を走れる我之を領す只無窮なるが故に古今來の三世は一に我に維りて存す我なくんは古なく未來なし況んや現在をや我茲に立てり我こそ世界歴史の出發点なれ我立たば世界歴史は進化の途程に登るべく我伏せば歴史は茲に逆轉せん、我を除いて又誰をか待たん、アレキサンダーは立てり而して彼のインダス河畔に泣きしアレキサンダー、奈翁は歐洲を馬蹄以て蹂躪せり砲煙天に舞ひて爲に世界は暗かりき然れども只是一時のみ喧囂は默息せり砲煙は消散せり宇宙は今猶昔の如く山峙ちて大河永なへに流る、憤怒に咽んで空しく孤島に消れたる彼の大ナポレオン見來れば世界は遂に自力宗にて存立せざるを如何。

丸い卵も切様なり宇宙の真相も見様なり、眞理は常に中庸にあり、吾人は悲觀せざる樂觀の甚だ淺薄なるを厭ふと共に樂觀せざる悲觀の甚だ有害なるを嫌ふ、好ましきは悲觀の上に立てる樂觀なり他力順風に帆を孕まして自力操楫の生活にある哉、

大なる國家とは頭數と輸出入の多きにあらずして大なる國民に依りて成立するにあり大なる國民とは極めて腹の大きいなる胸の廣き以て千万人を容る底の大雅量あるを要す、徒らに自己の小我見に執着して公心以て眞理を求め誠心以て同胞と交り得ざるが如きは宜しく風船を飛して月世界に單騎旅行すべし。

自分は親友富岡の死を哭した、母親は眼を泣き腫らした、然しそれが何であるか、これは唯だ生命を希ふ生物的本能が恩愛の情と化合して發する死者に對する同情たるに過ぎない、そして大體は我と彼れとの離別を悲しむのである、されば人は多く死者か未來に永劫の生命を有つといふ信仰と彼我決して無窮の離別でないといふ信仰とに由てその悲哀を慰めることが出来る、さなくば大體は人力及びがたきこと、絶念めるのである、未だ死を哭するといふことを以て「死」その者の秘義に打たれたとはいへない。

文苑

はしか

福田風前

それはことしの四月九日であつた。ちやうど、一週間の春やすみを、ほとんど雨に、下宿にふりこめられて終つたので、學校へ出るのが何となく懐しくなり、前日はいろいろ愉快な考へに満ちて、登校した、その四月九日であつた。

ゆふべ銭湯に入つて、暖かに疲労して床についた爲めか、平日よりも三十分遅く、七時半にやつと目がさめた。ところが目がさめても、目があかぬ。無意識に手でこすると、目脂が山になつて、かたまつてゐる。あとから考へて見ると、ちやうど火山噴出の溶岩が凝結したとでも、いふやうな風だつたらうと思ふ。大きい塊が、頬を傳つて、バラ／＼と枕に落ちた。目があいて、感覺が明らかになるにつれ自分は非常に、顔面が膨脹したような感じが強くなつた。目蓋が非常に重くて顴骨の邊が、むら／＼する。餘程癢だが、一体病氣といふものを非常に輕蔑して容易に近よる能はずとおもつてゐる自分は、あまりひどくは感じなかつた。

何にしる時間が時間なので、飯もろく／＼食はずに、早速宿を飛び出した。宿のお婆さんが、

光線のあまり入らぬ暗い玄關で、靴をはいた自分の顔を、しげ／＼見つめてゐたが、多分幾分逆上のため赤い顔をしてゐるからだと思つてゐた。

空はうつくしく晴れて、向ひ山のも一つ奥の山の中腹に薄雲が浮いてゐるばかり。氣持ちのよい朝だ。しかしゆふべの細雨で道はや／＼ぬかつてゐた。小學校の生徒が、ちやうど蟻の行列のように向ふから續いてやつてくる。小將町と味噌蔵町との、ごちらかの巢へはいるのだ。小供につきもの、砂ほこりは、今日はあり難く、立たないが足駄の音、しやべる聲、實に騒々しい。

急ぐ自分は幾度か衝突しようとしたが、辛くもよけて、沈没を免かれた。それはよかつたが、どうも、老も若きも、醫專も、小學生も、會ふ奴／＼みな僕の顔を、妙な顔をして見て行くのに、氣がついてからは、いかにいつも自分の顔のことを忘れて終つてゐる自分も、や／＼變な感を起さざるを得なかつた。

高等學校風の歩き振りで、自分も勢よく校門をはいると、悠然として歩いてゐた神野君が、顧みて「や、お早う」といつた。そして「君！目が非常にあかいよ、ゆうべ遅くまでやつたんだらう」と驚いた調子でいつて顔をつく／＼見てゐたが、自分は別にそれに就いて尋ねもしなかつた。二人は無言で階段を上つた。

自分は考へた。これは、はげしい肉体的動の境から、や／＼靜の域にうつるとともに、精神作用がうごき初めたからである。

自分は、自分の目が見えないから、いかに赤く恐ろしく血走つてゐても、それが自分にわから

うはずがない。鏡にでも對して、自分を全く客觀視しない以上は、無論、僕、この素敵に内省力の強い僕のような男であつても、到底自分の目の現在の様を見ることは出来ない。従つて、これを見て神野君が驚いて注意したその一種の驚きや、恐れやのいろいろの感情のはたらきを、感覺するわけにはゆかぬのである。すなはち、他人が自分の此の目に對しておこす、いろいろの觀念を、自分は到底このまゝでは、感ずることは出来ないのだ。何故かといふに自分は、自分の今の自分の目に關する考へとして、自分の健全な目に對する一種の概念あるに加ふるに、更に前夜、風呂屋の大鏡でみた無事なおだやかな目に關する觀念が結びついてゐる。何うしても、ふたゝび此の目を鏡にうつして見なければ、とても痛切にその病に對する觀念を抱くことは出来ぬのだ。

だからだ。これから推考してみると、かういふようなことがわかる。すなはち、人間といふものは、精神上においても、やはり今の自己を自分一個で知ることが出来ないのではないか。殆んど、絶対にできないのではあるまいか。例へば、鏡にでも、たよらなければ、とても自己の顔面や背面やを見ることが、できないと同じく、現在の己が精神のかたちも、何にもものか、他の力に倚らなければ全然わからぬのではあるまいか。根本的にこまかくいへば、たしかに、かうであらう。書くとなか／＼長いが、考へればすぐだ。

教室へはいつたら、宇尾君がいきなり、「何うした／＼？ 何んだ、變な顔になつたぢやないか。顔が一面、ポツ／＼に赤くなつてゐる」樫田君も側から「おい、そりやニキビと違ふせ。天然痘かもしれないせ。早く醫者に診て貰ひ給へ」。僕はこれをきいて「さうか」といひながら、しばらく

然としてしまつた。

いろんな念が同時にわく。

一晚のうちに、どうして、そんなに顔が、かはつたのであらう？ 目ばかりでなく、顔までも赤くなつたのか。路上の人が、みな自分の顔を見詰めて行つたのも、成る程、その爲めか。天然痘？ ……まさか、さうでもあるまいか。と思つて思はずツとした。

やがて、「それぢやあ、醫者へ行かう。何んだか寒むけがすると思つた」と二君につげながら、僕は早速、町へ出た。校醫には、今頃診察してもらへる見込みはないとおもつたからである。足は直ちに、一月に種痘してもらつた佐川醫院へ向つて、その門前までも行つたが、忽ち踵をかへして、飯森醫院へ行つた。久し振りで病氣にかゝつたので、いろいろ心が迷ふ。殊に友にいはれて、何んだか、ほんとうに天然痘にかゝつてしまつたような考がしたので。

空はいつの間にか、薄黒く曇つて、見上ぐれば、何となくもの凄しい。自分は醫者に對する一種の恐怖（醫者は、肉体の神だと自分はおもふ）を抱きながら、元氣消沈の態で、醫院の西洋館へはいつた。看板には飯森診療院と大書してあつて、門前の有様、すべて堂々。嘸診察料が高いだらうと思つた。

右手の室に看護婦が二三人ゐて、僕の顔をみながら、二番といふ木札を渡した。患者待合室へ入ると、一人五十前後の顔色のよくないおやぢが、陶器製の大丸火鉢にだきついてゐた。はげたおたまを見ると、自分は何時も、冬ならば、さそ寒からう、夏ならば、さぞ涼しからうと思ふが、

茫此のおやちのあたまを見た時は、殊に此の感が痛切であつた。あまり福のありさうな人ぢやない。壁上の定め書きを見ると、午前八時より診察とある。やがて、看護婦室で三度續けさまに呼び鈴をならしたのを合圖に、いよ／＼先生の御診察がはじまつた。自分は、たゞもう病氣が心配で／＼ならなかつた。頭のなかで、たえず天然痘々々々とひく。あばた／＼と鳴る。且つ、破れ靴の當然の結果として、泥によれてしまつた、靴下をぬいで座つてゐたので、悪寒が更にひどくなり、爲めに、自分は、一番のおやちさんの長い診察のわひだ、たえず煩悶してゐた。

そればかりでなく自分のあとから、やつて來た青白い顔に、眼部綳帶を施した、瘦せた十五六の小僧と、「余はハイカラである」といつたような、氣障な顔付をした若旦那らしいのとか、無遠慮に自分の顔に視線を集めるので、ひどく癢にもさはつて、心はなはだ平かでなかつた。一体、商人といふものは、自分の店から足をふみ出すが最後、常人よりも禮儀とか作法とかを何とも思はぬらしい。まるで忘れて終つてゐるらしいものだ。

やがてチリン／＼と勢のよい鈴の音と共に、看護婦室で、「二番の方！」と呼んだ。早速戸を排して診察室に入つたら、一番のおやちさん、寢臺に寝て居た。「先生は何か用事が出來て、居ないな」と思つて、しばらくポカンと立つてゐたが、安んぞ知らん、正面に詰襟の黒服をきた、代診とみたのが、御本尊であつた。青く勢ひのない顔が、やゝほそ長く、うすいしよぼ／＼の髭（醫者には屢見るやつだ。生えないのを、むりに生やすからだ。髯さへ生やせば、容貌が立派になると思つてゐるのだらう。また、醫者に髭は、關係密接、なくてならぬものとても考へてゐるのだらう）

が横つてゐた。

顔面全体、殊に目をよくみてから胸と背とを見せろといふから、寒む氣はするが、勢よく上着をぬぎ、シャツをとつたところが、驚いた！實に胸から腹から自分の見得る限り一面の赤ポロ！その時の氣持ちは、その時の自分でなければ到底、わからぬ。はゝあ、顔も目もこれだなどと思ふと、路上の人が見詰めて行つたのも、ハイカラ若旦那が、輕蔑したような目付で見てゐたのも、友達か、いろ／＼と注意してくれたのも、當然のことだと合点する。いやはや、大變な事になつてしまつた。天然痘？！多分そうだらう。外に、恐らくはこんな病氣は、あるまいぢやないか。かう考へてひどい悲觀に陥つた時の心持ちは、未だに忘れられない。

醫者もやはり、これを天然痘と思つたらしく、いろ／＼心もとないことをいふ。

「今は熱はあまりないが、ないのが變だ、もう少したつと大ぶん高まるだらう。一体君は種痘を最近いつやつたね。はゝあ、此の一月ですか、一月の何日頃ですかといひながら、診察簿にかき込んだ、佐川でやつたのですな。學校でやるとよかつたですな。種痘は絶対の豫防にはなりませんよ。何にしる、今の容態では、よくはわからないが、あの天然痘の假痘といふやつ、あれかもしれない。熱まなければよいが、うめば避病院へ行かなければならぬことになる。何れにせよ、傳染病には違ひないから、成るべく公衆の前には出ないようになさい。また、冷ねるのは、ごくわるいから、早速歸つて、温かくして休み給へ」

かうだ。僕の感情は、だいぶ動揺した。神経もだいぶ高まつた。

薬をうけると共に、診察料はときいたら、看護婦め、わかりきつたことだといつたやうな顔付で、「いりません」自分はこの時まで、東京の名醫と田舎の名醫とを同じに見てゐたのだ。

折柄雨が意地わるくも、ふりだしたので、自分は、勸工場の前で、人力をやとつた。車上、金澤天氣の不平等どころの騒ぎでなく、たゞもう、一刻も早く床にはいつて、少しでも病氣を軽くしようとおせつてゐた。

宿の格子戸をくぐつて式臺に腰をたると同時に、自分は、俄かにほんどうの病人になつたやうな氣がした。自分の二階の三疊の部屋では、病氣の時はや、不便なので、下の六疊に床をしいて貰つて、こゝに幾日間かの病氣の根據を定めた。自分が歸ると、いつも靴をぬぐ間に、直ちに辨當を包みの中から、とり出して臺所にもつて行くのが、お婆さんの例なのだが、今日はそこをこゝろでない。いろ／＼わけを話すとお婆さんの驚いた事。然し「まさか、ほうそうではありますまい」と慰め口調でいつた。

床にはいつてから、自分はいろ／＼な想ひに悩まされた。發汗劑をのんでゐるので、熱い事／＼とても寝入ることは出来ぬ。それでも頓服薬をやつて、下痢したあとは、幾分か氣がやすまつて、午後二時頃まで熟睡した。午前にも命じておいた、粥が出来てゐるだらうとおもつて、持つてこさせると、朝たいた麥飯に湯を注いで、再度煮たものを、平氣で持つて來た。自分がこんな粥をみたのは、はじめてお婆さん相應の仕事だと思つた。

三部の安藤が二時半に歸つて來て（安藤といふのは、僕と一歳違ひの叔父で、共に此の宿の二階を占領してゐるのだ）「天然痘ぢやあるものか。はしかだよ。／＼。去年、おれが、はしかだつた時とおんなじだ。もう一遍外の醫者にみてもらつてたらい、だらう。飯森といふ人は表てつきはいゝが、つまらんものさ。高が醫專出だ。殊にあの人は外科が専門なのだ」と親切にいつてくれた。三時半頃に、宿から二町許りの庄田といふ、豫備一等軍醫正の人がきてくれた。自分の顔を丁寧に撫でまはしてみながら、「こゝりやあ、立派な麻疹ですせ」といはれた。麻疹！麻疹といへば、多く子供の時にかゝつて、二度とかゝらぬのが通例な病氣ぢやないか。あまりつまらぬではないか。天然痘が麻疹となつてしまつた。しかし自分は、忽ち心の安まつたのを覺れた。

自分は醫者の歸つたあとで、早速葉書と、繪具をもつてきて、自分の手頸の物すごい麻疹の有様を、寫生して、都の弟に送つた。どんな返事がくるだらう。

晩食の粥も、麥飯から製せられた一種異様の粥であつた。「明日の朝から、白飯の粥をつくつて下さい」といつたらお婆さん、變な顔をしてゐた。使に出るのを幸ひに、カステラを買つて來て貰つたところが、その不味さ。「森八にないもんだで、尻垂坂の下で買つて、まいりました」といふが、價が馬鹿に高くて、カステラそのもの、形体は極めて小、且店ざらしの下等な製だ。聊か、辻褄があはぬ上に、釣り錢の勘定がよほど、あやしげのもので、そのいふところとあはぬ。此のお婆さんは、その夜女の客が二人來て「あんた、早く相續をおきめならんと死水をとる人が……」云々といつてゐた通り、家族が一人もない、あはれ孤獨の身であつて、従つて金錢の

方もあまりゆたかでないらしく、度々「福田さん、お金少しばかり、貸して下さらんか？」といつてくる。それで僕はその時、お婆さん、大分窮策をとつたなど思つた。しかし病人の考へだから、あてにはならぬ。

とに角、孤獨の老人といふものは、全く家族的制裁といふものがないから、性行が、幾分常人と違つてゐると思ふ。これは確かだ。

深夜ふと目がさめると、障子一面に月の影。しばし幻かと疑つたが、さうでない。床をいで、見ると、驚いた、此の室には戸がないのである。何んだか冷やつこいと感じたのも道理、障子一重で、冷却した夜の大氣と接してゐたのであつた。金澤は、まことに、平和なるかなど切に感じた。しかし、いかに平和でも、平和ばかりなことはない。戸もなく戸じまりも設けず安閑としてゐるとは、普通の土地の人ならば、下宿の客に對しても、捨て、おけない筈である。こんな事を思ひ乍ら、自分は早速、疲れた身で、重い蒲團と毛布とを次ぎの飯食ひ室に運んだ。

翌朝は、ゆふべよりも、更に甚しく發疹してゐた。發疹するほど、よいときいて、自分は懸命に發疹を祈つてその一日を床上に過ごした。いろ／＼な觀念はわくが、みな病氣に關したことや、病的の思想だ、大抵、自分の習慣に従つて手帖に書きとめて置いたが、今一寸見あたりぬから、こゝには、はぶく。その翌日も／＼同じような生活を續けた。庄田先生が、毎日來診されて、「あなたの麻疹は、こりやあ、思ひの外、輕かつたわい。しかし病に余病を起すると、よくないから、充分御注意なさい」といはれた四日目の日には、もう非常に快くなつてゐた。

友の大森、山田の二人が、病氣見舞のために、門前近くまで來られた相だが、たま／＼安藤に出會つて、自分の病氣が、はしかであるときいて、直ちに逃げ歸られた相だ。傳染を忌まれたのであらうが、聊か滑稽に聞けた。

かくて自分は六日目すなはち四月十四日にやつと床をはなれることが出來た。登校したのはその翌日であつた。麻疹は輕症であつたらしいが、根が熱病なので、先生は「成るべくならば、温泉へでもいつて保養して、いらつしやい」といはれたが、由來病氣を輕蔑するくせのある自分は、充分養生するの途に出でなかつた。これがために、自分は麻疹全癒後一週間にして風邪にかゝり、咽喉を害つてしまつた。それが、なかく快くならないで、學期ちゆうの病氣となつてしまつた。自分は時々天然痘を思ひ出しては、當時の狼狽を笑ひたくなる。

生

羊角生

拾月の末だ。

秋の日は犀川西岸の高臺に近く下りて小馬の橋から堤つたひに帽子も被らずうつむき勝に上り行く洋服姿の學生の背に淋しい日光を投げかけて居る。

鬢を被つた様に伸びた頭髮は白く雲脂の浮いたまゝ、肩の邊まで深くたれて色白の顔は一層陰鬱に見ゆる。しかし其高い鼻と細をもとの廣い額とは氣高いしかも眞摯な様子を見せて居る。

固く右のカクシのピストルを握つて所々に女郎花の咲いて居る石塊道を辿つて行くと、石垣の間の蟋蟀が鳴き止んで、遠く過ぎるとまた愁しい音に鳴く。

彼——太田正雄は今蓮華ヶ淵へ急で居る。

正雄——高等學校二年生なので——の意思よわく感情のごく繊細かな天性は思ひつめると瑣細の事にも激し過ぎて、これまで何度か危険い目に自ら出遇つた。彼が今度自殺を思ひ立つた動機にしても自分で思つて居る様な力があるものではない。時代の思潮と云ふものは怖ろしい力を持つて居る。最近思想界の動亂は早う父を失くした少年の頭をも嵐の様に襲ふたが正雄が中學四年の時知己の導きで基督教會に名を連ねてから今まで懷疑らしい懷疑にも捕はれず至極無事で日曜日毎の教會出も怠らぬ比較的眞面目な信者として暮らして來た、

それが近頃になつて初めて信仰の動搖を感じる様になつた。別にこれと云ふ科學と信仰の撞着にも會はなかつたけれど理窟で養はれた頭に高い情操の界は永く彼に表はれなかつた。理窟がものを云ひ初めた。正雄の上衣の裏のカクシにいつも入つて居る手帳にこの様な事が書いてある

「靈とは何ぞや。肉とは何ぞや。吾等肉体を無視して所謂靈的なもの、存在を見る事はせず。畢竟靈肉一致なるべし。」

「畢竟罪惡と言ふものも一個の習慣性に過ぎない。源泉を利己主義に發し永い星霜の間法文の力、

社會制裁の力の下に養はれた習慣性だ。習慣は習慣で破る事が出来る。汝の祖先が蓄髮して居たとて汝が斷髮を笑ふ者はない。況んや髮の有無が地獄と天國との分水嶺だと云ふ者の愚なる事や」

此様な思想につれて信仰は漸次動搖し初めた。一夕祈禱會の折正雄の此大膽なる告白は單にこれまで親しかつた教會員に嫌はるゝ様にさせるに過ぎなかつた。困難を冷笑で打消す事を利巧と思つて居る牧師は理窟に捕はれて居るんだとて相手にもしなかつた。教會の石段に立つて丈高い行儀よく並んだ圓葉柳の梢に輝つて居る大きい星を見た時に何とほなしに吾身の當來を怖ろしと思つたが其も永い間の情性だど一喝して町へ出た、其後教會へは足歩もしない様になつた。時折バイブルを讀んでも昔の様な感興を覺えなくなつた。

エスが猛烈なる野心の臭に堪へないの、ゴルゴダ丘上の磔殺をユダと計つた最後の茶番だのと友に話した事さへある。

一度捕へた者を固く握つて放たぬのは宗教の力だ。人前でこそかく大きい事を言ふもの、靜に考へる毎に生來の眞面目な性格は心の奥底に横はる大なる欠陥を不問に置かなかつた。元よりかゝる欠陥の理窟で埋まる者ではない。科學や倫理や、哲學の問題ぢやない。耽想が高じ不安が絶えず終に一徹な正雄は自殺を思ふ様になつた。

此だけならまだ自殺をとも思はなかつたろうけれど不幸にも正雄には三ツ年上の戀人があつて……詳しく書けば長びく怖れがある……二ヶ月許り前に結婚した。氣の小さな彼は打ち開けなかつ

たので向の方も終に知らずにすましたわけだ。其やこれやで正雄は思ひ定めた。石塊の堤は盡きて舊い破れた蛇籠の並んで居るあたりに出た。當惑相に興奮しきつた蒼ざめた顔を上げて行手の川添の森を睨む様に見て居ると呪はれた様に黒い鳥が一羽森を離れ川に落ちる様だつたがまた上つて向岸に見えなくなつた。思出した様に蛇籠の上をわたり初めた。折々朽ちた竹が嫌な音をして折れる。

淵に着いた頃日は落ちて頭の上まで真紅に染まつた空を飛び行く鳥が美しい。兩岸は數丈の絶壁となつて孔の底の様な感じのある淵へ鮮紅の空は淡い光を投げ込んで居る。對岸の崖に下つた大きな白い花はあたりの静けさと暗さに暗示を與へてる様だ、鳥も鳴かず淵に入る流は涙を誘ふ様に囁いて淋しいつたらない。あたりのあまりに静肅なので興奮した胸も穩になつて動悸もそれと耳に響く。氣はめ入りながらも躊躇はせなかつた。ピストルを持つたまゝ右手をカクシから出して近眼鏡に近くコックを上げた。汗と脂でツルツルする手をズボンで扱いて、さて淺瀬の中の大きな墓形の岩の上にとび上つた。

藩政時代の名残の水門が夕闇に怖ろしい真向ふに見える。高く上げた銃を次第に下ろして例の白い花に來た時狙を定めたが、また思ひ返してズット下の胴孔に向けた。今空の鮮紅とあたりの暗愁とが其色白の美しい面に争ふて居る。胸裡には恐怖と決意とが縋れ合ふて居る。しばらくして轟然として銃口が光り淵が鳴つた。岩の破片が水にポツリと落つる音が淋しく聞えた。また寂寞に反つた。空には白い雲が流れて夜の色は次第に深く恐怖は胸に益々募る。しまいには立つて居

る足が慄ひ初めた。ドッカと岩に座して不甲斐ない意思のよわい身を慨いた。涙は淫然として頬に流れ唇を噛む齒は白く慄ふた。つと前のピストルを取つて冷たい銃口を額に當てたが既に正雄は恐怖の捕虜であつた。思想の矛盾ぐらいで人は死ねるものでない。

「輕卒な死様をしてはならん。自殺で解脱が出来るじやなし」

かう尤もらしい獨ごを言つて慄ふ手でコックを下ろした。事後に來る理屈は全て屁理屈だと言ふ。いくら理がつみ條がたつて居たとて屁理屈は到底慰藉とはならん。人こそ見て居らぬ耻辱の念に堪へなかつた。小銃をカクシにして岩から河原の石塊の上にとび下りた時またしても死の前に戦慄して羞耻の涙が留度もなく流れた。斷崖の頂なる枝振面白き松の間に水色の光を放つ一つ星が涙の目に大きく見える。

半時間の後正雄は兵營の上の細い五日ばかりの月を右手に見ながらコッコンと小馬の坂を上つて居た。一步を木立に入れないながら

「靈の力？肉の力？運命の力！」

二

年が暮れて明治四十一年の正月が來た。机に倚つて正雄は眠れる様に深い耽想に沈んで居る。ランプもともさねば唯闇に火鉢の今ついだ炭が青い焔を上げて折々どび火が美しい幻想の様にパツと光る。茶の間からコチコチと柱時計の音が寸刻を刻んで居る。正雄は心ひそかに今日の日を期して居た。

昨秋蓮華淵で見事失敗したものの、尙生活は彼の心を引き止めるにあまりに力よかつた。旅行も面白くなくなつた。科學も園藝も今は心を引かなくなつた。戀は正雄にとりて苦き回想である。學藝もまた空虚なる遊戯だ。一言にして言へば正雄は人生に對する感興を失つたんだ。名譽も利達も無意義なる望と見えた。パンの爲めだからとて嫌なものに繋がつて行く程墮落もして居ない。何事も手につかなかつた。

人生は苦き汗液を盛つた囊の様なものだ。觸れると直ぐ其苦き汗が滲み出る。要するに深く考へず皮想の快樂でごまかして人生は送るべき者だ。と、かう正雄は思ふ様になつた。そうして酒の飲めない寂寥を切に泣いた事もある。

何事も手につかず二ヶ月を過ごして第一學期の試験が來た。當然の結果として何一つ満足に出來たものもない。六ヶ月後の苦痛がこの望を持たぬと言つてる青年の頭を度々嚇した。此が肉の切實なる力なんだ。而して何故となく正雄は元旦を最後の日と期した。今では彼は死は物質の解体だ位に考へやうと思つてる。

今頭を其大きい兩手で支えて種々の想ひに耽つて居る。無邪氣な少年時代の生活の樂しかりし事苦しかりし事が様々の装をなして眼前を走馬燈の様に彷彿去來する。

正雄が永く思ひに沈んで居る間に庭の竹藪に風が鳴つて遠くから「風呂がわいた〜」石油の空鐘を敲く音も漂て來た。鼠も二度ばかりゴトゴト云はせて引き初めをやつて居る。椽の下ではジーツと虫の音が聞えた。風呂に行くらしい隣の主人の聲もした。終に正雄は永い想から頭を上

げた、火鉢の炭は僅かに星程の火種を残して悉く灰になつて居た。葉のない梢に風の渡る音がした。門前を通る駒下駄の響はカン高く鳴つた。さぞ星のいゝ晩であらう、

机の引出を探つて漸く二三本残つて居るマッチを取り出した。目映しいランプの火を去けて横向くと室の隅にかゝつて居る大きい亡父の肖像が見える。嘲る様な笑が頬に上つた。散らばつた洋服の上衣のガクシから白い紙包をとり出して机の上に擴げた。灰色の毒藥が一さじ許りある。専門學校へ出て居る従弟から盜犬を殺すのだからと言ふて一月許前にもらつて一度使つた残りなんだ。今が最期と思へば流石に優しい本性に反る。母に今一度會ふと立上つた。

茶釜を間にして相對して座つた。永い物思ひに沈んだらしい重々しい顔を上げて母は正雄を見た。彌陀の救を信じ切つて死を待つて居る深山の湖にも例ふべき母の心にも尙新年毎に新らしき巻を開くにつけて亡き夫亡き子を思ふて睚が濡れる。今年の春は殊に此冥途を思ふの念に堪へぬ。生き残つた一人の子正雄が物足らぬ淋しげの様子は此廣い家の空氣を腐らしてしまつて隅々までも陰鬱な氣がのたくつて居る。新年とは言へど苦り切つて何が目出度いと言つた様子の正雄を見てはうそにも元氣が出ない。宵の口から默然として爐の前に座つて考へ込んで折々コッコツと眠い頭が下がる。また急に思ひ込む。

「どーで今年はわたしも……」

此様決着した時正雄が入つて來た。

二人が無言で淡い烟の中で見交はして居る間に櫓がバチット折れて火の子がとんだ。二人共何か

言はうとあせつては居るが言葉が出て来ない。殊に母親の方では何か言はねば、まづい顔をされねばならんと思つてあせればあせる程口に出ない。正雄は此が最後と思ふせいか至極温かい情に堪へない。しかと言葉が出ぬ。

「お母さん何かお菓子はありませんか

終に意外の邊に言葉を得て口を切つた。

「最中が少しばかりある。其でも上がれ

立土つて後の茶棚から新聞紙と茶盆とを出した。茶盆の上には暮に買ったばかりの朝日(茶の名)があつた。

無言でバラバラと直さ碎ける廉價い最中を食ひながら烟を去けて横向ひて居る母の衰へた皺の多い横顔を見て居ると何とあはなしに哀愁に堪えぬ。

「チットモ正月らしくない。淋しい晩だ。」

「十時も打つたら買初めに行つてくれれば氣が晴れるだろうに」

正雄はふと柱時計を仰いだ。九時二十分だ。

「外でいくら騒いだつて腹のどん底から淋しいんだもの」

「お前はあんまり迷ひ過ぎる。なろう様にしかならないのが浮世だもの、みんなあなた任せに生きるも死ぬるも……」

と他時でない雄辯で言ひ出すと正雄は茶碗の湯を灰の中に流して

「迷ふのでない。面白くないのだ。」

菓子食へばアマイ。甘いけれども面白くない。

生きてるのが厭になつたんだ。

こう遮つた。直さ激するのが正雄の癖なんで。

「いんにや。其がみんな吾儘から起るのだ。そう言やあ、わたしなんかお父さんが亡くなつてから十年と云ふもの何が樂みで生きて來たと云ふものだか。此世ばかりが一生だと思はなけりやこそ小言も云はずこうして來たもの。苦しい日もあるがまた明日の日を思へば幸福に過ごして來れたもの。迷はつしやるな、次の世が大事だぞの。働いて見さつしやい、屹度氣が晴れるぞへ」

確信の影が母の貌に表はれて火箸を捨て、話した

優しい情を以て來た正雄も次第に此等の會話に傲岸になつた。正雄は常に思つて居る、何もせず暮らすのがこれで大きい仕事なんだ。

「痒い處を搔くのさへ嫌なんだに汗を出したり出来るものか。

生きてさへ居らねば苦しい思をせんでもよかろうに、一体まあ何だつて生産んだんだろう。生産まうと思ふて生産んだんではなし、一層の事オギアと言ふた時ひねり潰せば何でもない者を。

ア、嫌だ嫌だ。をもしろくもない。」こう云ひながら

青白い顔に生々しい苦笑を湛へて俯視してる親——生産み、また養育て、くれた——親——呪ふへきか？謝すべきか？——親を見つめながら立上つた。

「二十三にもなるんだもの、無理もない。嫁など取らなくては」

かう眞向ふから來ると一言もない何か云つて見たいんだが思ひつかない。明朝になつて吃驚しろと思ひながら立去つた。(まるで猛獸だ。)

正雄が机の前に反ると洋燈も薬も先のまゝになつて火鉢には白く尉が塊つて居た。折れる様に座はると直ぐ薬紙を取上げて少し其香を嗅いで居たが少しも香がない。灰色の粉がウジョウジョと動き出しはすまいかと思はれる

「考へまい々々々」

眼をつぶつて拜む様に口に含むと机の上の冷へ切つた水をグツと咽喉を鳴らして呑んだ

ふと眼が覺めて正雄はキョトキョトとあたりを見まわした。見れば自分は炬燵に上向けに寐て居た。机の上のランプは細い淋しげの光を投げて直ぐ頭の上の父の肖像が薄暗く何だか壓する様な心地がする。硝子が異様に光つてる。

「呑んだ筈だつたが」と頭の中であれかこれかと記憶を辿つて居た、先づたしかに飲んだ事を思出す。ひどく頭痛がした事から苦しまぎれに指を突込んで圓窓からお正月の雪の上に嘔吐出した事や其でも止まんのので隅の炬燵にもぐり込んだ事まで次第に明かになつて來た。分量が足りな

つたのか知らんと思ひながら寐反へりすると床の間の富士の軸が見える田子の浦らしい松原のあたりから本立てに隠れて見ぬ。本立てには此休暇に詳べく見やうと思つた社會主義の書類が紅い背皮を見せて並んで居る。花瓶には眞白な寒椿がある。まだ確かに生きて居るか何うか明白ではなかつたけれど。

「生きてる生きてる。まだ確かに生きてる」と念を押す様に繰返して蒲團の下から左の掌を出して打ち返へし見た。たしかに生きてる。昨夜手の甲に書いた「生」と言ふ文字が薄れながらもまだ見える。

「生！生！」と小言に言ひながら云ふべからざる壓迫を感じる。

攝理の奇しき力が特に吾身を捕へて居る様に感ずる。刺す様に涙が滲み出る。感激の涙である。流れて枕が冷たくなつた。急に炬燵の火が消れて冷え切つて居るのに氣が付いて起き直つた。頭はひどく澄切つて居るが身体は非常に物倦い。見れば郡内に葵の紋の夜具を着て居る。頭痛がして炬燵に入つた時に出した覺がないのでお母さんのわざだと氣が付いて昨夜の亂暴な己が舉動が思ひ出る。慚愧の念に堪へぬ

湯が呑みたくいので机の處へ來て見ると先つきの湯呑に半分ばかりまだ残つてる。氣味悪相に灰に流して冷れた一杯を呑んだ。見れば机の上には痛む頭を支えながら書いた感想録様のものが二寸四方程の小さな紙に書いてある。ランプの心を上げて讀む。

「此不可解の一大球上に浮んで不可解なる宇宙の大海に漂ひながら人類相互が自らの微力を知ら

す憐れむべき者なるをも知らずで攻争に日を暮らす醜汚の様よ」こんなものもある。

「淫亂！淫亂の一語は吾にとりて忍ぶべからざる不愉快なり。

何故ぞや？因習のみ。習慣のみ。」こんなものもある。

「人といふ者はよわい者だ。必ず不満足に終るとは知りつゝも冬となれば菜の花を思ひ、雲雀を聞けば秋風を思ふ。

かくて永劫につられつゝも重き足を引いて人生の旅を歩み行く。人といふ者はよわい者だ。」
うも書いてある

ふと放浪の譜と鳴りぬ

湖岸の蘆の葉に

風鳴りぬ、

其徃方求むべき

よすがなし、

此様な呑氣らしい事も書いてある。一番下に繪葉書が一枚ある。和蘭あたりの景色らしい。海岸に風車の磨粉小屋とも言ふ様な繪にベツタリと濃い墨で。

「姉さん！私は今毒を仰いだ後に尙姉さん懐かしの念に堪へません。こゝろあろうとは思ひながら姉さんは私の唯一の戀人だつた」

一通り読み終つて最後に何と感じたか鉛筆を取つて

「真理とは何ぞ？虹を求めて廣漠たる野をさまよふ者は災なるかな、一碗の飯、一碗の水、以て足れり。何の真理ぞや。何の不朽ぞや」と書いた

氣がつくとランプの心が上り過ぎて笠にも紙の上にも油煙が粉になつて沈む様に落ちて来る。息がつまる様に感じ吹き消して障子を明け椽に出た。溢れる様に星は輝いて居る。いゝ夜だ。星と星との私語だに聞き得る様な静かな夜だ。勿論藪を渡る風もなく里近ければ買物に出る人通りもない。優れて高い樺の木の小梢に北斗七星が其尾を隣の機業場の方に向けて悠然として懸つて居る。北極星は樺の中程に幹に接して輝いて居る。

「真理の星だ、理想の星だ」

下駄を引つけて庭に下りたが雪の爲めに歩む事も出来ず雨戸を背にして凝然晴れたる空の極星に視線を注いで居る。

「空には真理の星、統一の星があるけれど人の間には、我心の中には標的性格もなければ期すべき理想もない。何を爲すべからざるか？何を爲すべきか？されど今日の我は昨日の我でない。いたくも夜の清新なる氣に觸れて真理なくも理想なくも尙よく生き得るを感ずる

とこゝろ思ひながら兩手を背で組んで立つて居るとドラコ星座のあたり長い尾を引いて星が流れた。焼きつける様に眼に映つた。胸裡の奥底をも星が流れた様な心地がして白く敷ける雪の上になふれ首をたれた

「神様々々今あなたに深く感謝致します。かの一疋の猫が甕から通れる事の出来なかつた様に小

さき理智に捕はれて足搔きも出来なかつた小さき者を導ひてあなたの大道に呼びかへし給ひしあなたの奇しき攝理に對し感謝の外ありません。蓮華ヶ淵での失敗も今宵不思議に命長らへしも思ひ到れば悉くこれ大なるあなたの思召しに過ぎません。神様々々空に流るゝ一々の星だにも風に鳴る蘆の葉だにもあなたの御力ならではいかで流れもし鳴りも致しませう神様々々わが心の奥底にあなたに隨従しまつる事の歡喜を種々付け給ひし事を感謝致します。神よ希くばあなたのお心のまゝに導き給へ。甘き酒、苦き酒お思召とならば何れをも辭しません。

三

爾來それから正雄の生涯は一變した。沈黙だまりがちになるにつれて友少なにはなつたが生來の美しい性格は残りなく發揮されお母さんには親切にするし少ない友には眞情まことから交はつて閑暇ひまある毎に讀書と耽想と森林の逍遙に其清高なる性情を養つて居た。繪も書き初めた。天文の書も少しは讀み初めた。正雄の書齋の壁には自ら書いた

意思の鍛鍊

情操の涵養

なる十文字の自戒がかゝつて居た。而して教會を離れて眞の基督者として清き生涯に一歩を入れた

四ヶ月去つて若葉の美しい五月中旬となつた。連日の春雨が珍らしう晴れて塵なき空の星明き夜大事にして居る「寂寥」と言ふ尺八を持つて犀川河畔を川上の方の上つて行つた。菊橋あたりで東

の空が薄明くなつたので月の出だろうと思ひながらまた歩を進めた。小馬の坂を上つて崖の上に立つた時に醫王山の肩あたりから其清い姿を表はした。稍黄色を帯びてあたりはまだ小暗らい。川瀬の音は此轉々として軋り上る月の爲めに斷續の譜を奏して居る。顧ると足もとは十數丈の崖で川を距てた對岸の兵營は僅に覺束ない形を漸く上り初めた月に示して此岸を彼岸との間犀川の流域は大なる謎谷の様模糊として横はつて居る。正雄は崖の縁に腰を下ろして横から尺八を取り出した。天地は今音の世界となつた。笛の音と瀬の音は偕調をなして我なく素より月も森もない。わが吹きすすむ笛の音に心を澄まし忘我の妙興しほしに少時しばしあつた時俄然として連日の雨に緩ゆるんだ崖は一時に崩れて側の芝草を握る間もなく正雄は此謎谷に落ちて巖に頭を碎いた。

元より正雄が二度まで死を決した事は誰知る人もなく彼は不測の災厄さいごに死んだ。

生の不可思議なる意義に到つては終に人間の問題でない永久に月の者だ。然り月のものだ。謎谷のものだ。(五月三十一日)

桐の實

江南文三

病室の窓から、ガラス越しに灰色な西の空を何心なく眺めてゐた時、急に夕日が雲間に輝いて、

虚空が二つに裂けた様に眼を射たので、周章て、顔を引込めた。

室内は、白の瓦斯綸子の蒲團も、病人の青白い額も、枕元の和本も、すべて弱々しい光に夢のやうに照されてゐる。見れば友の従妹は髪まで細つた。

其時仄かに白い湯氣が鐵瓶から立つて暖い音を立て初めた。窓の外縁に置いたコップの花の花瓣と葉とが水の上に透通つて湯氣の蔭に淡くなり濃くなりしてゐるのが、小人の戯れてゐる様に見える。

奇麗な鳥があると看護婦に言はれて窓の外を見ると、其處の空地に枝の細かい木が五六本、黄金色に日を透く葉を小波をくゞるうろくづのやうに顛はしてゐるので、その後方にある斜に日を受けた櫻色の一棟が水底の珊瑚の家居のやうに見える。屋根を越した上つ枝は風當りが強いと見えて葉もまばらに、夕靄の中に淺紫の帚木となつてはかなく見える。曇つた空には一面に薔薇色の朽ちた芳ひが泌み渡つてゐる。地には炊事場の煙が中庭まで匍ひ込んで来て、木の根を徘徊り落葉の下をくゞつて、櫻色の建物の翼の蔭に集りひそむ。その中に眞つ直な青桐が惘然と立つてゐる。

看護婦は、今この青桐の下で、名は知らぬ瑠璃色の尾羽の胸の赤い山鳥位の大きさの鳥が、番ひで、お菓子やうな赤い嘴で落葉の中を探してゐるのを見たと言ふ。

はと思へば、桐の廣葉が死鳥のやうに落ちた。暫くは煙の中に青い幹と並んで、その通つた道が空柱のやうに残つてゐた。

見ると鳥はこの枝の上で實を突つ啄いてゐる。夕暮の羅は今日の姿をすべて包んで影の昨日に沈めやうとしてゐるけれども、この二羽の鳥は依然としてその表に浮んでゐる。亡骸のやうな木に依つて僅かに残つた秋の歡樂の名残を啄んでゐる比翼連理の鳥は、此世ならず怪しくも美しい影であつた。

病人には先刻からの我々の話聲も耳に入らぬのかして、そのまゝ身動きもしないで窓ガラスを見つめてゐた。ガラスには蠅が一匹日向ぼっこをしてゐる。病人は過去も現在も未來もすべてみな忘れて、ぼうつとしてこの動かない哀れな秋の蠅を見てゐる。その唇は眠れる懐子の静かな氣息に聞きとれる母親のやうにあどけなく半ば開いてゐる。自ら何所にゐるか何を見てゐるのかも知らないだらう。

蟬は室内の温さに慕ひ寄つて、ガラス戸にひたりと身を附けたまゝ、小さな腹と透通つた翅を動かして忙しげに呼吸してゐたが、やがて幻影のやうに消去つてしまつた。此時不圖斯くして人の魂を導いて行くのではあるまいかと思つた。それは丁度此時美しい比翼の鳥が大きな羽音を立て、飛去つて行つたからである。

もう一度鳥が來れば桐の實もみな盡さるだらう。もう一度風が吹いたら盡く落ちてしまふだらう。其時はわびしい冬が來る。

飄零

篁竹花

此處は越路の荒涼たる雪野である。
 黄昏にはもう間が無さうだ。
 吹雪を含む鈍色雲は、死衣の様に野に被つて隙目も無い。胸を貫く許りの鋭い懐い空風。枯れて淋しい檜林を毆打ちつける唸聲。宛然我が世の破滅を喜ぶ悪魔の笑だ。要するに、此の大自然を遠慮なく露骨にした姿である。
 浪の立たぬ白金の海を、横に長々と曲る一條の流がある。見ても寒むさうな冬の水が、「此様に寒むくちや、とても動きやしない」とでもいふ風に、鈍う不活潑に、河床を匍うて居る。
 兩岸には冬枯の榛樹が、コサック兵の長槍めかして、スクスクと空を衝き、一本毎に水に巻かれた枝は、此の寂寥に堪へられないで、何か私語してゐる。鹽梅に、相摩しては、小さい秘密らしい音を立てている一體の様子が、一種形容の出来ぬ、物憂い氣に壓しつけられて居ると見ると、雪の上に黒点が生れた。見ると、蠅程になる。栗程になる。勝山通の馬車だ。
 赤土色の馬は、鼻を高く空中に擧げ、霜と白い息を、荒らかに吹き立て、活潑に動く筋肉には、幾條となく黒き汗を流し、長く嘶いて鬨打振り、打振り、走つて来た。太く力強い足は雪屑を蹴散して、銀粉の霧を起して居る。重々しい車輪の響は、沈んだ空氣に連る。

古い外套の頭巾目深に被る馭者は、強い寒さに氣をいらつて、一鞭無慈悲に打鳴らすと、紐は瘦せたひばらに、はたと吸ひ付く。馬は驚いて飛び上る。箱は揺る。客は跟めく。車軸に付いてた綿の様な雪は。ぼたりと落ちる。
 跡には、二條の轍と、亂れた轡の跡とが雪に淋しう。
 いつしか大安寺山の峯のあたり、灰色の雲が細う裂けた。其の隙から、血紅色の夕陽が現れた。
 同時に天地は、花墨粟色の幸福な、日光の海に浴した。
 文珠山、大目岳、椿山、象頭山の諸峯から國境へかけてグル／＼と國の三方を圍む山々峯々の複雑な表面は、あの南の海の暖い潮に育つ珊瑚の色に打映て、丁度寶石の浮彫みたいだ。
 一野は只見る、血潮の大海原。
 一天は只見る、火の大海原。
 暴君ネロが焼き盡した羅馬の火事も此れには優るまい。何の事は無い、地は一大紅蓮の朝風に、思ひ切つてさと開いた風情である。
 喜悅、嬉樂、平和の香は満ち充ちた。自然は今美の極点を仄めかして居るのだ。何だか感情の烈しい、詩人の胸の様にも思はれる。
 此んな崇高い眞美は北國特有だ。油繪も寫生もあつたものぢやない。然し半時と経ぬ間に、夕日は滑るやうに落ちて、黄色い餘光を雲の一部に投げつけながら、やがて眼を閉ぢて仕舞つた。
 忽然、喜悅は悲哀に、嬉樂は煩悶に、平和は荒涼に、「雪の天國」は「雪の魔界」と一變した。

此の一刹那こそ眞に、悲しき、淋しさの最高点である。

うら悲しい様な、物憂い様な、泣きたい様な、拗戻たい様な、叫びたい様な、實に何ともいえぬ、烈しい苦しい、鉛の様に重い感じが胸に迫つて、居ても、立つても居れぬのである。

入相の鐘がなる。
忽ち見る。かくまで淋しい冬枯野を、神に見離された、猶太の老人の如く、杖を力に踉蹌とよろめきながら此方へ来る、影法師がある。

暗いので、よくは解らんが、重々しい其の歩き振りに非常に疲労して居る事は確かだ。一歩行つては、立ち止まり、二歩行つては頂垂れ、首擡るさへ、懶である。

漸く頃合の石を、見出し、雪を掃うて、崩れる様に腰懸けた。

自然は今深く寢込んでしまつた。西の方の低い山の頂を一尺程去つて燦々と光る星一点。

冷たい冬の星の光——悲しくいとほしき其の老人。

五位鶯が鳴く。犬の遠吠がする。

黒い影は頭を上げて何か物を云ふ。あゝ暖れた其の聲。餘程年寄だらう。寄る年波と不幸とは、

深い／＼皺を、額に刻み、頭には、春來ても溶けぬ、霜降り、日光に焼けた皮膚は黒く、眼は甚く凹み落ちて、光は鈍く濁り、頬は憔悴、骨高く、唇血なく土色に乾き、眉のあたり苦痛不安の雲かゝり、全面悲哀の表情を有つて居る。手袋もない、足袋もない、有つ物は杖一本、地圖の様に、縫ひ綴つた衣は、一種の臭氣を放つのは、長年さすらうた故だらう。

夫れにしても、一体何方へ行かうと思ふのだらう。

又何處の誰だらう。

問ふを止めよ、聞くを止めよ、此は行衛定めぬ飄零の人だ。

彼は蜻蛉の様に瘦せた兩手で頬杖をつき、何所とも無く、見詰めて爲るのだ。やがて瞬が次第に早くなつて、終に大きな涙が、血の氣のない頬を流れる。中心を失つて、將に石から轉げ落ちやうとした事は幾度もある。時々又皺多き手を延ばし、何か眼の前の物でも除けようとする如く掃ふ。

突然絶叫して、頭髮を振り、よゝと泣く。かと思ふと、莞爾と笑うて、何か聞える様に、耳を傾け、其の方向に走り、又反対の方向に走り、前よりも一層落膽して元の石に腰懸けた。

老人の胸は、今悲しき思出に張り裂けむ計りである。

『……思ふにまかせぬを浮世の常とは吾も知つて居る。其にしても餘り苦々しいでは無いか吾の運命。』

錦着る筈であつた體には破れた綿入、妻には逝かれ、子に死なれ、生く可き甲斐は更に無いが、何せ死ぬなら、其の前に戀しい故郷一目見て後でと此處まで、流離て來た譯だ。

噫、あの星は妻の靈ではあるまいか『來ませ』と呼んで居る様だ。噫、あの鳥は我が子の魂ではあるまいか『なつかし』と叫んで居る様だ。

よに零落程辛い物は無い。自分も昔は富み榮えて居つた。人にも恵み、自分にも餘る程であつた。白壁の土藏幾棟、大名にも劣らぬ庭屋敷の建築、數多の召使、皆我物であつた。今は此杖一本。

美し妻、いとし妻。あ、今は冷たく淋しき奥津城の苔の下。
 さう、緑酒紅燈の下に知己親戚と席を連れ、高砂の謠を夢見心地に聞いた宵あの恍惚とした、
 涼しい目付、今も眼の底に残つて居る大事のあつた日は、胸の憂さを共に慰め合つた。幸福有つ
 た日には互に心の悦を分けた。譬ひ身は死んでも兩人の愛は永久に渡つて消えんと迄誓つた事
 さい有るでは無いか、憐れ不便や、今は命日にさい草一本手向る者も無い。此れが浮世の運命と
 いふものか。

其かあとは、何を樂に努力が出よう。
 現に居ても夢に夢見る心持で、あらぬ事までかこたれて悲しう、淋しう日を送つた。「有てる者
 は興へられて尙餘りある、有たぬ者は其の持てる物をも奪らるゝ」と古の聖人が教へ給ふた如く、
 不幸は不幸を生み、我も昔は男山さかゆく時もありこしものを、見事零落の淵に沈んだ。
 前に罪なき嬰兒を抱き、脊に未來てふ虞を負ひ、あてもなく、住みなれし故郷を後に、零落の谷
 をとぼ／＼と暗黒の中に降りて行く心の内は眞に、血の雨、血の涙。
 只嬰兒の可愛さに、且つは妻への回向にと、己は瘦せて子の爲に、或は野原の露を袖によけ、或
 は濱邊の浪に裾潮垂れて食を求め、枯野の中や、山の奥、霜結ぶ曉や、雪降る夕、一心不亂には
 ぐくんで七才と云ふまで、育て上げたのを、ナンボ無慈悲な運命の手じやないか、我より奪うて、
 黄泉の客となしはてたとは。
 望も力も消え果てた此の体。駒もすさめずかる人もなき老草のもう苧環をくるかひもない。あ、

墳塋戀しと叫んだが、只死ぬ前に故郷を一目見たさに、遠い路、さすらひさすらひうらぶれて、
 漸く此所故郷に着くを得た。
 わく思ひ残す事露もない。汝故郷よ。至親至愛なる我故郷よ、汝は永久に我死体を葬れ！
 又吹雪になつて來た。自然は既に此の通りだ。人間が如何して永久に平和であることが出來よう
 ぞ。

戦闘だ！戦闘だ！人の世に休息はない。人の世に平和はない。自分は此の戦闘の落武者だ。何で
 怨言を並べやう。潔く討死するのだ。
 あゝ戀し妻よ、あゝなつかしき我が子よ、汝の夫は今汝に行かむとして居る。汝の父は今汝の傍
 に行かむとして居る……」
 龍馬曳く冬白姫の銀の輪に、碎けて飛び散る玉屑は、下界に今粉々たる白雪と、降つて居る。老
 人は遂に石から轉ひ落つた。再び起る力は無い。其の儘眠る如く不歸の客と成つたのである。雪
 は自然の棺となつて、死体を埋め盡した。
 冬の野と夜は更けて沈んく。

うば玉。暗の中に雪許り灰白う降り迷うて居る。
 この嵐の中を一連の雁がねが、よろめきながら鳴いて行く。凍えて死んだ人の魂では無からうか
 と思はれる。憐れな聲！
 翌日太陽は常の様に燦々と東天へ昇つた。山も河も依然として少しも變らない。

鴨足草

江南白雪

夜の町

ほのほふ紅梅いろに
 わたゝかき春の夜霧は
 店並の燈火に立ち
 大街を籠めて浮べは
 夢にみる海のさまかな。

行きずりにつと翻り
 襟足をさやかにみする
 黒髪の魚もこそあれ
 花さける丈の海松布や
 振袖は下になびきぬ。

耶蘇堂の大巖陰を
 春の月黄ばみて出でぬ。

湯呑所

寄宿舎の湯呑所の戸を
 夜推せば、石の段みえ、
 昇りきて争ふ湯氣は
 面をほひ、手がらみまどひ、
 地の底に身を引入れぬ。

あやしげの組入のはてに
 涙眼してけぞほくすくむ
 電燈の菌めぐり、
 苦なす煤の花さく
 霧の間に、身はこめられぬ。

椅子による二人はあれど、

みをつくし、否、ひともとの
 脛白の電信柱、

その蔭をならびて泳ぐ、
 うらわかき魚族を見よ、
 羅紗服の學生二人。

後ろよりこは亡霊の
 海坊主、黒さ影乗り、
 大馬に跑を打たせて、
 見かへれば早行き過ぎぬ、
 禁軍の士官なるべき。

わざと又兩手つなげる
 うるはしき戀慕人こそ
 櫻貝眞珠貝なれ、

穴藏のもぐらの形に
 まろき背をならべてねむり、
 みさび沼の泡沫のごと
 ふつふつと折々かたる。

やがてまた爐のふすぶりに
 咽せ入りて涙をこぼし
 ふくれたる寐惚がほ見よ、
 ものうげに烟のなかに
 ねがへりてわれにそむきぬ。

小使部屋

みぞれするこの背を
 仕切りなく語りたる
 小使の一人は
 酒飲みに町へ去る。
 残れるは漢殿り

立ちながら、へろへろと
 よろめきて吹吐びたり、
 木茸か此奴はど
 思ひつつ見ておれば、
 また椅子に土偶のごと
 居沈みて、先の世の
 報にか、かうべのみ
 絶間なく静に振る。
 天井には電燈と
 爐の湯氣と、あかくなり
 暗くなり争へば、
 釜の湯はその下に
 胸たぎちひた泣けり。
 尙儂なる瘦せ椅子ら
 どりどりの並居また
 いどをかし。棚みれば
 空徳則法師めき

つくねんど物言はず。
 煤かぶる掛時計
 老いし眼を光らせて
 つぶやきぬ、夜は更けぬ。

夏の花

日は照らす、岡つづき
 炭を焼く夏のはな
 今さかり時めきぬ。
 山つつじむらむらと
 むらさきの幄張れば、
 けしの花、貴に酔ひ、
 茴香は日に消ゆる
 夢のごと伏眼しぬ、
 つばなこそほほけたる
 ざれ舞の法師なれ、
 そがなかに射干の

立居しもおぎやかに
 禮つくり眼さましや、
 撫子はらうたげの
 君達よ、やはらかに
 晝顔のあえかなる
 手をとりて夏をゆく、
 とりどりにあはれなり。

さしめく板

昨日は赤き實の落つる
 闇穴道をたどりさぬ、
 今日青藻に眞白なる
 花咲く海に珊瑚樹と
 椰子橄欖をはてしらず
 くぐれるごとし——日も夜も
 わやしき夢に深へば、
 稚さどきに見し鳥の

羽ばたき啼ける響して、
 いと遠き世に赤兒泣き、
 うつろの空に蠅見えぬ、
 いづれかうつゝ、——わびしらに
 日はかたむけり、我はいま
 夕といろきをあとにして
 死の瀬にかゝる浮橋を
 よろめく魂の脚下に
 さしめく板の音を聞く。

日かげ

はつかにのこり、赤々と
 空のうつろにかゝり居る
 木の實の下をくぐるとき、
 つばき、桂木、石楠ら
 葉の艶鈍りまごろみて、
 露の鉛の雫しそ

土にももうき音たて、
 黄泉路の川に流れ入れ。
 合歡の裸木ただ覺めて
 婆羅門のごと立ならび、
 木ぬれに赤き橋を
 悲しげにのみ眼守り居ぬ。
 さてかかる間も葉を攀ぢて、
 人こそ知らね、目のかげは
 生命の丈をはかるらむ。

「えせもの」

山田 龍風

○生死

生や何、死やそも何
 知識得て、如何にかすらむ
 世に生きて、さて其後は？

先づ思へ、あゝ先づ思へ！
 國家や何、社會やそも何
 なやむ身には、大なる哉
 個人てふ、あゝ此事實
 家もなし、また國家もなし
 愚さよ、實相と見るか
 虚相の、現世をしも
 五十年の、人の生命は
 異りや、水泡のそれに
 永久なりや、空蟬の世は
 わゝ夢よ、結びもやらぬ
 活きなむや、刹那の生を
 永劫の、世は迎ふるに

住むべしや、悶えながらも
 生も空、死も亦空よ
 悶えなき、空にぞ行かむ
 死の聲や、あゝ懐しき
 安き哉、あゝ死の眠り
 苦みも、惱みも消えて
 觀樂の、歌をば唱へ
 幸多し、羈絆はなくて

○夜

魔に追はれ、眠りは成らず
 衾蹴て、外にし立ちぬ
 夜は更けて、黒闇の道
 流離ぬ、單身のみにて
 森かげの、おくつき指しぬ
 なさんと、物語らむと

首垂れて、思し吐けど
 風のみは、慄きて吹く
 我が今の、此叫喚は
 響くらむ、冥府の大城に
 わはれ此、涙のいづみ
 湧立たむ黄泉の庭に
 病羸に、衰へはてし
 肉塊は、土とし朽ちて
 人々は、今淨樂の
 城に紅の、肉相抱かむ
 懐かしや、人々はみな
 去にし哉、骨のみ残し
 輕き身に、天へと行きぬ
 悲嘆をば、現世にとめて
 あはれ世を、吾れまた去む

世の重傷、あゝ夥多得て
活きし吾れ、疾く往む哉
なつかしき、人々のもと

○夢

地も遙るに、占めてぞ立たす
簀やげる、山城の上の
玉臺、そをこそ目指し
至りしよ、黒金の門

閉されし、扉は開かれて
入りし身の、黄金の宮の
若やげる、女の膝に
抱かれて、嬉しかりしよ

久しくも、旅したる身の
苦ほしき疲れもいえぬ

温かき、血のたぎつなる
肉塊の、苗にあれば

餓ゑたりし、唇活きぬ
眞情の、接吻うけて
肉の、愛にし泣きぬ
奇靈の愛さながらと

夜は去りて、黎明の鐘
と破りぬ、静寂の幕を
山の端に、紅してぞ
騷擾の、世に開けてゆく

あゝ夢よ、夢にしあれば
消えうせて、影だに見えず
現世も、あゝさならずや
吾れは泣く、攝理の前に

(完)

四高俳句會

菖蒲湯

菖蒲湯を 出て 四辻の 幟かな
菖蒲湯や 紅の根を なつかしむ
とめ桶の 菖蒲に遊ぶ 子供かな
朝の町 菖蒲湯を出る 人美也
五月蠅しと 菖蒲押しやる 湯槽哉

蝙蝠

物 干の 晩酌人や 蚊喰鳥
蝙蝠や 隣で 貰ふ 行水湯
物 干に 禪白し 蚊喰鳥
明日晴る、白檜空や 蚊喰鳥
蝙蝠や 堂の扉を 閉しゆく
蝙蝠や 空晴れ 渡る 夕河原
蝙蝠や 暮れ行く 村の 子守謠
蝙蝠や 温泉守が 納屋の 壁の 穴

夏草

夏草に 鞭打てば匂ふ 何の香ぞ
草茂る 瀧口庵の うしろかな
分けゆくや 夏の草路 陸奥の旅
夏草に 置忘れたる 日傘かな
夏草や 堀割の土手 新らしき
鐘掛の 突兀と 草茂る
夏草や 四明ヶ嶽の 朝嵐
夏草や 跣足で涉る さく流れ
並べ干す 蠶の網や 草茂る

送別の句

忘れてもな 飲給ひそ 古ラムネ
三つやればあどの淋しき金魚かな
閑古鳥のやうに明日から淋しかる

落うなぎ

美

島

君や待つと 片野の丘や 麥の笛
 鳥陰や 海に面して 麥 畑
 晝鶯の 噂や 村の 麥の 秋
 麥干すや 鶏か糞する 蕙先き
 五月雨や 龍の 目光る 繪 天井
 五月雨や 吸取紙の 吸はずなる
 ミシン屋の 多き長屋や 五月雨
 五月雨の 鏡橋走る 夜汽車かな
 灰箱に 小猫の 糞や 五月雨
 新聞で 包みし 靴や 五月雨
 靴箱の 黴の 香ひや 五月雨
 五月雨の 柳 けふるや 驅黴院
 火を 入るゝ 煎餅臺や 五月雨
 五月雨や 川に網はる 落 鰻

草鞋日記 大磯小磯の 田植かな
 早乙女に からかひ行くや 藥賣
 我庭や 梨が 一番 蟬 多し
 午后となれば倉の陰木や 蟬が鳴く
 土出でゝ 薄羽乾かぬ 小蟬かな
 蟬鳴いて 涼し 歸省の 朝門出
 とどかんとする手に枝の蟬遁ぐる
 啞蟬を つかむや 蟬の皆遁げぬ
 磯清水 雲母きらめく 砂地かな
 藻の花や 水田の中に 清水沸く
 磯清水 十戸の村を 養へり
 鎌どくと 清水にひたす 夏野哉
 薫風に 江り 心地や 青 疊
 夏川に 羊洗ふや 風 薫る
 草に寐て書を讀む 尻や 風 薫る
 教室に オルガン 弾くや 風 薫る
 繭買の 帷子涼し 風 薫る

青竹を 竹屋がわるや 風 薫る
 服ぬいで 浴衣を着れば 風 薫る
 湯 上りの 風 薫る也 大 鏡
 我庵は 青葉の中よ 青 嵐
 青 嵐 城の午砲の とどろかな
 明け易き 眞菰の 中や 舟博奕
 鶯さわぐゆるぎの森や 明け易き
 短夜の 汽車に 波見る 沖津かな
 短夜の 森に 乞食の 紙帳かな
 裸男の 胸毛 涼しや 竹月夜
 涼しさや 水に灯うつる 橋普請
 小兵とは 申せど 矢數ゆゝしけれ
 藥玉や 茶の釜 たざる 青 簾
 藥玉や 局に 參る 文 使
 葉櫻や 遊 動木に 人たかる
 葉柳の 岸に おり立つ 嗽かな
 葉櫻や 煉瓦 作りの 家 簗ゆ
 葉櫻に 百本 杭の 夜釣かな

葉櫻に 江戸川沿ふて 電車かな
 學寮の 葉櫻 そよぐ 灯かな
 汐浴びる 女 美し 夏 帽子
 水兵や 垂の涼しき 夏 帽子
 葉 柳 や 夏帽多き 取引所
 藻の花に 舟漕ぐ人や 夏 帽子
 汽車下りる 登山の人や 夏 帽子
 夏帽で あふぐや會釋しながらに
 夕食の 灯火もれて 葎戸かな
 葎戸はめて浅黄の暖簾かけにけり
 汗じみし 浴衣 かけたる 葎戸哉
 白壁に 夕日あたるや 枇杷熟す
 油繪の 羅白き 神女かな
 羅や 欄に 星を 仰ぐ人
 御座船の 浦吹く 風や 羅に
 白木綿 洗ふや瀬々の 鮎 早し
 清湍や 鮎敷ふべく 底の石
 葉隠れに 鶯老いぬ 雲 林 院
 避暑の温泉や 夏の休も あど幾日

雜報

新寮の落成

南寮炎上のことありて以來ふた歳、校庭をが一角は焼野が原となり果て、古城の麓、黒土漫草の間に、中北二寮のみ寂しげに聳立す、青衿子あり、來つて玻璃窓を開き空うち眺めて心悠々たり、突然、梢頭の梟けたましく啼き立つるや、青衿子顔を袖に覆ひ驚いて寮の奥深く遁入す。勇躍の氣概ありやなしや。

寒梅綻び楊柳緑を含む頃より、匠石斤を運らし、奚仲工匠を督す、所在斧鉞の響あり、蓋し新寮の起工を經始したるなり、忽ちにして輦飛輪奐、土木の勝を極めて新寮二棟、満天の新緑を壓して落成し校庭の偉觀を爲す。

今や健兒一千、四高聖域の人とならんと門前にひしめく、健兒かの新寮を仰ぎ見て莞爾たり。英才衆を抜くもの、やがて此新寮に溢るゝの時、寮は死灰の間より解脱して従來の喪服を捨て、活躍の新衣を着するならん。新寮の落成は是れ新寮風の樹立なるを思ふて欣喜に堪はず。

(かたし)

中堅會

かつて寮内此種の會合ありしも何等のローレ、スピーレンするなくして消滅せり。寒潮事件の喧かりし頃と覺ゆ、各部二年級の大團結即ち、中堅會なるものゝ組織せられしを聞知せり。四高の分散、割據は蓋し幾久しきものなり、その爲め多くの不利を醸し悪影響を蒙りしも甚だ多し、故に其名の奈何に係らず、横に縦に校内を貫徹する團結の出現して此弊を一掃せんとは吾人年來の願望なりき。

二年級の中堅會は、或は夫れ枚を銜んで言無きの下心ならんも、發會後徒らに白日を閑過し、毫も活躍せし面影なし。校友の統一、意氣の振興、これ爲し得可くんば大に結構なれど、尙其他に中堅會が大鐵槌を振り翳して躍進す可き境域多し。曰く爲す可きこと極めて多し、然も中堅會が何等の足跡を止めずして終る如きあらば吾人の遺憾之に過ぎざる可し、切に中堅會の痛快なる運動を望む。(かたし)

退壇の辭

音樂の價值

音樂部設立の趣旨

去る可き時は到來しぬ。后りへには多士濟々、

築瀨 成一

安んじて後事を托するに足る、退くに當つて深く愁へず。只僕雜誌部に入つてよりこの方、雜誌部が著しく校内の思想に遠かり、北辰會各部の統一機關たるの實を失ひしは、僕の大に苦痛とする所なり。素より僕とて就任の當初、一片の

大絃一度彈すれば嘈々として九天の蛟龍頭を並べて下るが如く小絃一度之を奏すれば融々として雲間の天使が福音の響となる。げにや、社會鬭争の裡にありて耳朶一度、諧音の美に接するに及んでや涙潜然としてそらろに人生の苦楚

に泣き、叫然たる物慾主義の巻に在つて鼓膜一度、靈妙の絃聲にふるふに當つてや、怡然として天上の靈趣に憧れ、陶然として物外に放逸し、天地と共に冥合するの思あらしむるもの、それ藝術の吾人に與ふる賜に非ずして何ぞや。

聽けや、秋夜草間にすだく虫聲の韻々たるひびきを、陽春三月、花間に歌ふ小鳥の妙音を、溪韻松聲、落葉かさこそひびきにも無限の情思を置むるを聞かば、いかで自然即てこれ至妙なる音樂なるを悟らざるを得べき、思へば情生活を營む吾人々類のみ獨り歌はで黙すべきや。

音樂は情生活の反映なり、されば人あれば必ず音あり、社會あれば亦樂なき能はず、曲節ある歌謠の起源が言語の發生に先つ咏嘆の聲なりとせば音樂の起源は直ちに以て人類の起源とその期を同うせずんばならず、然り吾人はあらゆる他の藝術よりさきにまづ音樂なる賜を享受せ

るなり、思ふて茲に至らば天意に反して樂を卑む世の人の、宛ら天に唾するにも等しからずや。韓退之曰く。樂世壽於中而泄於外者也。と

げに歌は感情の表現なり、思想の反映なり、胸琴の神韻に共鳴してひびき出づる調べなり、されば音樂は最も剴切なる個人性の發揮にしてやがて之れ國民情の表現となり、實に又時代精神の最完美せる表象に外ならず、ブラトローが「汝に許さるべきはドリアとフリギアのみ」とし銳意優柔なる和絃を排したりしに希臘の文化やいかに、悉く音樂を廢せしシノイスの民の末期や如何、變をして典樂を司らしめ直而温、寬而栗、剛而無慮、簡而無傲なる美德を養はしめて舜の治はそもいかに、思へば音樂の時代精神に投影し一代の民風衆俗に及ぼす影響の甚大なるにその驚嘆の胸を打たずんばあらざるなり。

今日音樂を論ずるもの往々にして眼孔狭小、

至樂の精髓をも究めずしてたゞに現代の腐敗的方面のみを見て云爲するものあるは惜みてもあまりあり、されば現代の音樂は「少くとも我邦の音樂は一墮落の淵に沈みつゝあるを奈何せん。天の岩戸の鼓聲絃聲、長鳴鳥の讚歌に天劍女の尊の舞ひ出でけん我國古代音樂の純樸にして優麗なる音樂今日そもいづくにか求むべき。百合の花白き谷川のほとり群れる小羊を従へて晨の星に奏でけんダビデが豎琴の調べ、今の世將たいづくにか聞くを得べき。

もし夫れ音樂の精髓を知らんと欲せば、去つて一度西樂の史に見よ。太古希臘音樂のいかばかり純樸にして典雅なるや、下つてはヘンデル、バッハの宗教樂に於ける、グルック、モツァルトの歌劇に於ける、ハイドゥン、ベートーヴェンの器樂に於ける、千古の偉才踵をついて出で、形式に内容に純然たる最高藝術を完成し其ほとばしり

出づる處人生の機微を極め宇宙の至情をうつし、光彩陸離、眼將に眩せんとするの概あるものそれ中世紀の音樂に非ずや、更に眼を轉じて東洋の文華を望むに堯舜を典樂を初めとして周の音樂を重んじたる、洪武皇帝の大威の樂器制定の如き、中華の文化、音樂に重きを置きたる事意表の外に出づるを見ては且つその卓見に一驚せずんば非ず、試に荀子の言を聞かば

「聲樂の人に入るや深く樂人を化するや速なり、この故に先王謹で之が文を爲せり、樂中平なれば則民和して流せず、樂肅莊なれば則兵勁く城固く敵國敢て嬰せず、是の如くなれば則百姓其處を安んじ其郷を樂しみて以て其上を至足とせざるなし、名聲是に於てか白に、光輝是に於てか大なり、四海の民以て師となるを得んことを願はざるはなし、是れ王者の始なり」と、その他書經に「八音克く諧ひて倫を相奪ふなくんば

神人以て和す」といへるが如き樂記に「治世之音は安するに樂を以てす故に其政和し亂世の音は怨むに怒を以てす故に其政乖く」或は「凡音者生人心者也、樂者通倫理者也」と説けるが如き讀み去り讀み來らば何人か音樂の効果を非認するものぞ。

今日泰西文物と我との比較に於て繪畫に、彫刻に、いたく劣る處なきに獨り音樂に至つては霄壤も雷ならざるは何ぞや、之れ實に徳川三百年封建の壓迫に囚らざるばならず、彼一度音樂を捨て去るに及んで世人は藝術の尊嚴を忘れ、音樂を以て徒に歌舞遊宴の材と做しおはれ最高藝術たる音樂は社會の一隅に封せられて只下流賤女の器賤具とはなり了んぬ、かくて音樂は全く發展の機を失ひ加之漸く淫卑なる歌詞を取り來り、曲従つて流蕩、終に士女の嗜好に適せず、音樂は茲に全然藝術的精神を失ふに至れり、明

治の代に至りて泰西の文物叫然として輸入さるるに當り音樂も亦容れられてこゝに吾人は西樂の一端をかいまみるの機を得爾來十數年、今日に至つては滿都の子女音樂に趣くもの水の低きにつくが如きあるは抑も又慶すべきの徴なりや否や。蓋し世に半可通程恐るべきはなけん、味噌の味噌臭きは由來上味噌に非ず、文學を亂すものは文學の半可通なり、政治を亂すものは政治の半可通に囚らざるばならず、吾人は樂壇の神聖を思ふ事なき音樂の半可通の日に繁殖するを見るに及んで高なる美神の前に危懼の念措く能はざるを奈何せん。大音樂家ヘンデルの曲を作るや常に溢るる涙を以てせり、彼の下婢毎朝彼にチョコレートを呈するに、往々にして彼が墨汁と涙とを混じて紙上にペンを走らしめつゝあるを見たりといふ、彼が鬼神をも泣かしめし千古の秀曲は實に涙の結果なりしな

り、今日音樂に身を捧ぐるものかくの如き信條を有するもの果して幾人かある。トルストイ伯曰く音樂は恐るべきものなりと、然り音樂の効果や甚大なりと雖も一度其用を誤るに及んでは其弊害又之に譲らざるものあり、淫奔なる音樂の個人の品性を害し社會の風俗を賊し、更に一國の興廢に係る處大なるは史に明なる處、卑猥なる歌謠を唱ふる人にかで嵩高深嚴なる品性を求め得べけんや。帝堯陶唐氏帝位に即くや一夜微行して康衢に童謠を聞きしが如き、子遊武城の宰となつて絃歌の聲に聽きしが如き、王者の用意當にかくこそありたけれ。今の世強きもの虐げて弱きもの詔ひ、不義横行して義人かくれ、名利の下に血なく涙なく、日月も爲めに光なき現今社會の腐敗抑も那邊に起因するか、思ふ、これ儒教の罪にあらず、佛教の過に非ず、あゝこれ一音樂の墮落に起因せざるばならず

なり。想、一度こゝに至る、純樸なる俗習を養ひ、高高なる品性の陶冶を希ひ、強健なる校風發揚を望むものは乞ふ徒なる空論と抛つてまづ卑猥なる歌謠の撲滅を計らざるばあるべからず、さはれ人は歌なくして生くべけんや、たゞに卑歌を奪ひ去りて之れに換ふるに何物かを以てせざるは策の上乗を得たるものに非ず、されば淫奔なる歌謠に代ふるに温健にして雅典なる歌唱を以てせばその感化の及ぶ處けだし計るべからざるものあらん、音樂部新生の第一義は實に茲に在り。再び吾人は音樂の弊害に盲目なるものに非ざる事を叫ばんとす、否本部の新設は實に這般の弊害に對する反抗に外ならざるなり、滔々たる俗流をさけてこゝに温健なる四高音樂の發揮を希ふが故なり。藝術的音樂は到底プラトリーの所謂イオニアとフリギアとを以て満足せらるべきものに非ら

す、かくの如くんば、新緑の下、甘泉の湧きて盡さざる底の藝術的生命は、はたいづくにか求め得べき。されば藝術的音樂、そは今日吾人の大方に獎むる所に非ず。音樂的技術、亦わが望む所に非ざるなり、吾人の要する處は音樂の教育的効果のみ、歌唱の興ふる温健なる道義心のみ、イオニアとフリギアとを以て北辰校裡鬱勃たる若人の意氣を歌ひ出さんとするにあるのみ。

音樂を以て勇武剛強の精神を養ひたる例は二千年の歴史之を證し得て余りあり、往古スバルタの少年教育が唱歌を以て第一義となしたる如き、又は佛國第一革命、米國の獨立、さてはハニバルのアルプス進軍に於ける、近くは平壤の堅壘が軍歌に脆くも碎けしが如き見來らば蓋し思半に過るものあらん。

かくて強健なる歌唱をもて所謂直而温、剛而らす」と説けるが如き或はシヨベン、ハウエルが「音樂は直接に意志即感情、情慾に作用して是を昂め之を轉するの力大なり」といへるが如き性情に及ぼす音樂の力、没せんと欲するも得ざるをいかにせん。

かくて吾人が心情の欠闕を滿し、乾燥せるそが生涯に滴々たる草露を灑がん事を望むは本部存立の第三義なり。

わが音樂部はかくの如くにして起てり、古人曰く人心正しからざれば音樂亂れ、音樂正しからざれば人心又亂ると、吾人は本部が四高音樂部の名の下に滔々たる世の俗流を斥け茲に健全なる音樂の効果を收めん事を期して止まざるなり。

無慮なる校風を養はん事、これ本部新生の第二義なりとす。

人はパンのみにて生くるものに非ず、吾人は知識以外、その欠陥を滿すべき或物を求めつゝあるなり、進化論者ダーウキンも亦常に此欠陥を充さんが爲苦慮しつゝありしなり、彼曰く「我あやまつて科學に熱中したり、われもし再生せば宗教と音樂とに身を委ねて眞率なる人生を送らん」と、うべなり東西の先哲皆思をこゝに凝らして鋭意性情の涵養に苦慮せし事や、而も其歸する處樂に在るは東西其軌を一にするを見て更に眞理の通有性を感せずんばあるべからず、孝經に曰く「風を移し俗を易ふるは樂よりきはなし」と又「古人歌咏あり以て性情を養ふ」或はナポレオンが「美術中性情を陶冶し風俗を移易するの大なるは音樂に如くものなきが故に立法官たるものは音樂を最も保護獎勵せざるべからず」と説けるが如き或はシヨベン、ハウエルが「音樂は直接に意志即感情、情慾に作用して是を昂め之を轉するの力大なり」といへるが如き性情に及ぼす音樂の力、没せんと欲するも得ざるをいかにせん。

涼七題

川中の 根木によこたふ	涼みかな	芭蕉
犬に逃げ 犬を 追ふ夜の	涼かな	嵐雪
大木を ながめて ぬたり	下涼み	許六
砂濱に 雑魚 打あけて	月 涼し	子規
濱すゞみ 犬と 角力へる	童がな	蝶衣
夕涼み 尻をまくつて	歩行きけり	牛伴
涼しさや 花屋か 店の	秋の草	凡董

部 報

北辰會音樂會第一回演奏會評

新緑したるさつききの二日音楽部の第一回演奏會は開かれた、此日はポートルレースもあつたので自分は大野から歸つて金澤に入つたのが夕暮の七時頃、大急ぎで會場へ入つて見ればさしも廣い至誠堂、隅から隅まで一杯といふ盛況、聞けば序曲のバンド、ルームが濟んで石倉先生のアドレスが終り開會の君が代が濟んだといふ處、やつと席を見出してアログラムを見ると次はコーラス、奥國々歌である、正面ステージには燦然たる電光まばゆく照して、その柔かな光がピアノの金燭を照し流れて白い鍵盤の上にたゞよふてゐる、所々にさゝやかな盆栽が具合よく置かれて譜面臺の黒い光が白いカーテンを配

されてゐる具合、敢て飾らぬ處に面白味がある。やがて説明者が現れた、

○奥國々歌、樂聖はイドンの作、國歌中の國歌と稱せらるゝものだそうだが、之が絃樂合奏曲である丈けに優麗な雅致ある曲である、殊にグリーネン、クランツのあたり羽化登仙の思がある、出來榮は今少しの表情もがなど思はれたが然し自分は唱歌練習の時にも度々聞いたので一層面白く聞いた

○書生の旅、原歌はワンデルカード、西洋の學生歌との事「草鞋脚絆はきしめて菅の小笠打ちかぶり」の邊自分が中學三年のとき終日の演習に疲れ果てた時五年生の人が軍刀を振つて此歌を歌つてくれたので三瀬からあつみまで二里ばかりが間を苦もなく歩いた事を思ひいだされて其當時の有様がまぎろゝと眼にあらはれて來るのでそゝろに會遊の樂しさに耽つてゐると、

る、柴舟の譯を見てもこれが獨乙の名詩かと思はれる位、一体西洋の哲學詩は成程どうなづかれるが叙情詩に至つてはそれを受ける素質がないからためである、つまり言語上の翻譯はだめである、音樂は同じ樂器もて同じ曲を弾き萬人ひとしく同じ感興をうける、音樂は實に世界共通の言語である、此点に於ては音樂の天才に詩人の爲し得ざる事をなすのである、……こんな事を思つてゐる中に演奏者は歌ひ始めた、曲雅といふ向の曲であらう、技工を凝らさない處に妙味がある曲だ、これもやはり發聲表情が十分ではない様に思はれた殊にタイムの少しくあやしい處があつた様に聞かれたのはいかゞ、

惜しや説明者の聲に回想の夢を破られた

○ピアノ聯彈、マッケンジー氏が病の爲め遅刻するのでピエーア、フルトン君と築瀨君とのピアノ、デュエットとなつた、金髮の少年、臆する色もなくスデージに顯はれ來つて、ピアノに對した處は可愛らしかつた、曲も中々可愛い、ものだつた

○ヴァイオリン、二部合奏 尤大なるウォルフアルト先生と築瀨君とのデュエット、曲は故郷の流といふ、優麗な、物思はせる様な曲であつたウ先生がワン、トウと會場外までひやく聲でタクトをとられたのは至極愛嬌があつた。

○合唱。ローレライ、詩人ハイネの作にシルヘルの曲を附せしもの、獨逸の學生歌としてむかうでは歌はぬものもないとの事、評判ものと思ふからまア暗誦もするが想夫戀の歌より、より大なる感興を興ふるや否やは随分疑問であ

○ユーバイデー、元氣のいゝ歌だ、ロングフェローが不屈不撓の精神を歌つたものだそうである、こゝういふ力ある歌を持つむかうの學生は實に羨しい、かゝる強健なる歌唱を措いて吾

人青年の意氣を托する道はいづくにありやだ。寐むつた様な歌をうたつて校風發揚は頗る覺束ないものである

○サクソホルン獨奏、珍らしいので歓迎された、陰鬱な幅の廣い音色は何となく悲哀の念を起さしむるに足る

○ヴァイオリン合奏、曲はガヴォツテ、奏者は半月形となつて一齊にヴァイオリンを虹の如くに肩にかまへる、忽ち夜のしめやかな空氣を破つて靈泉の湧きて流れる様な、或は松風の韻々たる響を聞く様な、或は一高一低、胸の血潮の湧きかへる様な思があつた、けだし第一部中の大出來だつた

第二部に移る前に築瀨氏の音樂部創立の趣旨に就ての演説があつた

○管絃合奏、シャンパン、ガロップ、之れ本日第一の呼物である、當日の樂人伶人、左腕に維

琴かいこみ、右手に譜を携へてしづくと出で給ふ、樂器にうつる電燈の閃き、さては譜表のひらめき、さめき既に静つて奏者の眼、譜臺にとまると一瞬、滿堂そとの音もなし、忽ち起る怒濤澎湃の樂の音、ヴァイオリンの優麗なるメロデーにサクソホルンの奔放なる音色、さては

ピアノの輕快なる、諸音錯綜の間に糸の如く連る明活な主旋律、之に伴ふ和絃の点綴、新潮の高まり來るが如く覺ゆれば忽ちいさ、小川の樂しき調べの如くやがて夢幻の深い谷に投げ入れられるよと思へば若人の湧きたつ血潮のひびきにも似て遂に結曲の豪壯を以て終る、慥に當日の呼物たる價値はあつた、演奏も頗る身が入つてゐたのはうれしい。

○オルカン獨奏、ソナタ、樂聖ベートーヴェンが作、アーサー、マッケンジー氏が病をおしての演奏である、寐れるみどり兒にさやく天使

が調とも思はれて實にめでたい演奏であつた、此も當日の上出來の一である

○ピアノ、ヴァイオリン、デュエット、曲はモツ

アルトのラガロ、ホーツァイトアーサー、マッケンジー氏と築瀨君、兩君の技に就てはすでに定評もあるが僕は始めてあるから最も期待して居た處だ、病中のアーサー氏鬚だらけな築瀨君、細かき弓の流れと走る鍵盤の響、快活な旋律が隅から隅へと充ち充ちた時は思はず呼吸の音を止めた

○二部合唱、花にしき織なす長堤に、くれば登る朧月……うるはしい曲ではある、演奏者も大分疲れたせいか少しくしどろもどろの氣味が見えた

○破邪の曲、いつ聞ても愉快な歌だ、歌詞もよく曲に適してゐる。「かもへば及劔博愛の學理あり」とは大に吾人の意を得たものではない。

○流浪の民、原の歌はチゴイネル、レーベンといふ歌謠作者シューマンの作、石倉先生の譯

歌、家なく國家なく互に群をなして隨所に放浪し夜陰に乗じて林中に宴を張り其特有の樂を奏して喜ぶチゴイネルの漂逸なる生活眼前にあらはれて、いひ知らぬ感に打たれた、

校歌を唱して茲に會は目出度終つた、部員諸氏の苦心の結果は確に今宵の演奏會に表はれて吾人は只感謝するのみである、次會には部員會全体分業的に各自斡旋の勞をとつたらば蓋し其成績更に大なるものがあるであらう、妄評多謝

(部員の一人)

野球部南下の記

四月二日。天氣はすてきによい。朝八時の汽車で、一同萬歳聲裡に金澤を出發する。

七條の停車場へ着いたのが午後の五時、大學の先輩諸兄が迎へに來て居られる。中には去年の南下軍の彌次隊勇士のお顔も見えれば、應援團聯隊長閣下のおすがたも拜見する。

夜になつて大學へ着き先輩諸君の我が南下隊の爲に催された茶話會に出席する。終つて、應援團は百萬遍に、撰手は大學舎内に宿る事となつた。

此日、我が先輩諸君が盡力して呉れられた事は非常なもので、迎も言辭の盡す限でない。しかも諸兄は、一度我が南下の報を聞いて以來、此舉を壯とし、十數日以前から歓迎の準備に日も之れ足らざる有様であつたと聞いては、實に御禮の申様もない次第である。

四月三日。先輩栗田君の指導の下に朝練習をやる。

四月四日 午後、型の如く練習をする。夜、

三高の撰手諸君が訪問して呉られた。終つてから七高の撰手を訪問して快談した後、同撰手諸君から櫻島名物の大蕪の贈物を受けた。

四月五日、例の如く練習をする。

四月六日。彌々試合の日となる。正午頃、見物はすでに一ぱいで、ホームのネットかうサイドの方へ、三高の應援隊が席を占める、所へ我が應援隊が成川大人吉野達磨の兩君を先頭ににして、手に手に應援旗を振り、「たゞに血を盛る」の歌を歌つて操込んで來た。拍手が盛に起る。之がファーストの後へ席を占めて、大人君と達磨君の音頭で、盛に「フレイク」をやると、三高の方も、くやしかつたと見る、ボートの古いやつをかつき出して來る、洋服男が向ふ鉢巻、「ワシヨク」と太鼓を叩いて、やつて來るのはなかなか奇觀だ。お祭の様氣がする。

型の如く練習がすんで、いよいよ試合となる、

バッティング順は

- 高 下田 野 築 川 門 木 多 村
- 木 池 久 都 早 二 々 喜
- 三 IIR CF SS P IIB C LF IB RF
- 智 邊 崎 本 元 口 部 渡
- 校 和 渡 藤 谷 三 秋 關 海 石
- 本 IIB LF CF SS IIB IB C P RF

第一回。三高方が守る。菊地君が審判に立つ

て「用意」と言ふと、拍手が起る、四高は「フレイク」と旗を振る、三高は「グレイク」マイタホ」をやる。之がこつちやになつて「わわ」と聞える。

和智がはじめに四球で行く。渡邊のサクリファイスでIIBをとり、藤崎のSSゴロでIIBへ着き、不二門君のバツスでホームイン。こうなると彌次は大變だ「フレイク」和智」と盛にやる。

三高も一生懸命、木下が四球で行き、池田のサクリファイスで一舉IIB迄來る。久野の安全球でホームイン。都築が四球で行き、久野と都築が盛にストールルンベースをしてホームへ入る。次の早川はSSグラウンダーでやられ、不二門は三本にしどめられる。得点三と一。

第二回。共に平凡、得点三高の佐々木一。

第三回 味方は石渡和智渡邊、打つは打つたが皆三高方のお手柄となる。

三高は盛な盗塁と池田不二門の安全球で二点はいる

第四回。藤崎がバントで出發する、谷のセーフヒット、三本のセーフヒットで、ノーアウトのフルベースとなる。すてきに景氣がいい。秋元はバンドをやる、誤つて小フライとなる、しかも普通なら迎も取る事の出來ぬ位なやつだったが、敵もさるもの木下がやつとの事で受とめた。此

時藤崎はほとんどホームへ入らんばかりに来て居たが急に身を轉じて IIB へ駆け込んだ其敏捷さ、さすがにうまいものだど感心する。次に關口は残念三度振して、ツアアウトとなる。次の海部が IB へ打つたが、も早や事が遅かつた。

三高は木下も池田も更にふるわぬ、木村君は名譽の三度振をやられる。得点共になし。

第五回。本校方は平凡、三高方は盛にうつ、久野君が LE へ大々のハウルフライを打つ、LF の方に居た見物の後へ球が落ちて行く、渡邊は見物人の中へ飛込む。ときに渡邊が見物人の中から球を捧げて現れて来た。初めて渡邊があれを取つたのだと言ふ事がわかる。都築君がセーフヒットを打つ。早川君が亦 SS オーバーの好絶なやつを打つ、此時藤崎のかけて来て取つたのは實に特筆大書すべき價值は十分ある。しかし此爲都築君はホームへ入つた。

第六回。池田のセーフヒットで三高の宇喜多ジマ君が一点入る

第七回。第八回。第九回。双方一点も入らぬ。此間に目ざましかつたのは我が三本のセーフヒット一つあるのみだ。

即試合は、三高のプラスルに對し本校の一で、またもや第二回の南下野球隊は大敗した。

試合が終つて、我が應援隊は再び南下の歌を歌ひ、撰手を擁して大學へ引上る。

夜、百万遍の應援團で撰手慰勞會がある。盛なものだ。

四月七日。午前三高と本校とのテニス試合がある。午後七高の申込で、七高と野球試合をする。七高には應援隊が来て居ないから、こちらも旗を收めて静にして居た。

審判は前日と同じく菊地君で、バッティング順は

- 高 崎坂中田岸田田上野
 川上田安根野戸井猪
 七 IB LF IB P C CF IIB RF SS
 崎邊 本元内村渡部
 校 藤渡 谷 三秋堀野石海
 本 IB C SS IIB IB RF LF CF P

第九回。本校方も大にふんばつたが終にはいらないでしまつた。即七高方五本校〇で大敗となつた、
 終つて彼我撰手は打連れ談笑して大學へ歸つた。
 四月八日。空はどんより曇り、今にも雨が降りそう、如何にも陰鬱な日であつた。南下軍は此日京都を去つたのである。

謝詞

迄互に得点なく、悉くノック的に進行する。此間に異采をはなつて居たのは我が三本のツーベースヒット一つのみであつた、陳腐な詞だが後援つゝかすと言ふ次第で、をしい事をした。

我が野球部南下の擧を壯として、一方ならざる盡力斡旋の勞を採られし先輩諸兄へ謹んで謝意を表す。(加藤彌一記)

第六回。七高方上坂安田のバント見事に成功して二点はいる。

第七回。双方零。

高田中學と本校との試合

第八回。七高方は大に振つて、バントやら、安田君のセーフヒットやらで三点入る。

北越の強チームとして中學野球界に頭角を顯はし來れる高田中學野球部は其の修學旅行を好

機として競技を申込み。兎も角も北陸北半を
 難倒せしとの評判に驅られ來觀者は早くよりグ
 ラウンドの周圍に螺集せり。かくて醫學専門の
 加藤氏及金子氏のダブルアンバイヤーのもとに
 五月廿九日午後四時より試合は開始されたり。
 如何にせむ我れば之れ北陸の霸王餘裕綽々たる
 戦を以て十一對一にて遠來の客を打破れり。
 シニング左の如し。

第 第 第 第 第 第 第 第 第	第 第 第 第 第 第 第 第 第
一 二 三 四 五 六 七 八 九	一 二 三 四 五 六 七 八 九
回 回 回 回 回 回 回 回 回	回 回 回 回 回 回 回 回 回
高 中	1 1 1 1 1 1 1 1 1
本 校	1 0 2 1 1 0 0 5 1
	11 1

第一回。本校攻む藤崎投手にグラウンダーを呈
 して倒れ和智遊撃を突きて早く一壘にあり。渡
 邊バントに出で谷遊撃に小飛球を呈して死する
 や三本出で、三壘に熱球を飛す 輕快なる和智
 既に生還す。

渡邊三壘を襲ふて刺され高中代りて攻む。藤
 井先頭たり。遊撃に小飛球を呈して死し飯塚二
 壘を襲ふ和智御參なれと一壘に刺す。大島又二
 壘を突き空しく和智に功名を再びせしむ。第二
 回石渡遊撃に刺され秋本四球を得。野村投手を
 突く敵の緩漫な動作の中に秋元既に三壘を踏み
 しも海部手に一壘に刺さるゝに及びてやむ。高
 中代り堀田遊撃を突く谷取て一壘に刺す山本三
 振し小池二壘にグラウンダーを打て倒る。第三
 回藤崎出で、三振す和智バンドに出で渡邊一壘
 に飛球を獲られ谷長棍を撫してボックスに立つ。
 果して憂然響ありと見る間に球は大飛球となり
 て中堅オバーレ和智を追ふて勇躍して谷本壘に入
 る。之を今日最初のホームランヒットなす。三本
 三壘を突きて死し石渡投手に一壘に刺さる。高
 中軍宮澤出づ。海保に弄殺され丸山投手を突き
 一壘に入り野田三振に倒れしも藤井二壘を襲ひ

二壘のエラーに乘じ丸山二壘に入る 飯塚遊撃に
 熱球を呈しその捕球を過るや丸山生還し高中漸
 く生氣あり 大島投手を突きて死す。第四回秋元
 遊撃を突き一壘に刺され野村バントに出で海保
 の四球を刺し出づや機を見て三壘を突き本壘を
 窺ふ海部直に二壘を突き投手周章二壘に投じ之
 を刺せしも野村疾走本壘を襲ふ藤井の好球も遂
 に及ばず生還す。藤崎三振して代る。堀田四球
 を得山本一壘に弱球を呈するや堀田二壘より三
 壘に走る野村取て三壘に刺す。山本二壘を襲ふ
 て捕手に刺さる小池三壘の虚を突き宮澤に送ら
 れて二壘を得しも三壘に冒険を企て、投手に刺
 さる。第五回 和智遊撃を突き渡邊出づ早く既に
 二壘にあり渡邊の三壘オバーの安全球により生
 還す渡邊一壘二壘間に挟撃せられて死す。谷三
 壘を襲ひ三本右翼に飛球を飛ばすや小池取て谷
 を一壘に刺してダブルプレーを演ず。高中丸山

三壘に打ちて死し野田投手を襲ふて倒れ藤井又
 二壘を突きて得る處なく志氣甚だ昂らず 第六
 回 石渡投手を突きて死し秋本遊撃の虚を突き
 しも野村の投手に小飛球を得られて返す手に一
 壘に刺されダブルプレーの再演は醜体。飯塚投
 手に弄殺され大島投手を突き倒れ堀田捕手のエ
 ラーに一壘を得しも直に二壘に刺さる 第七回
 海部遊撃を襲ひて死し藤崎バンドに出しも和智
 二壘に打ち渡邊一壘に飛球を呈して共に死す。
 山本投手を突き倒れ小池バントに出しも宮澤丸
 山枕を並べて投手に弄殺されてやむ 第七回
 我が軍振はさる久し而戰機正熟せざるに非らざ
 るか谷先頭に出づ、高中の外野相戒むと見る間
 に打上げし大飛球は右翼の後に轉々し再びホー
 ムランセットの光榮を博す三本三壘に熱球を送
 り石渡安全球を飛し三本三壘にあり高中軍の守
 備漸やく色めき來る秋本過りて本壘に死せしも

野村バンドに出て三本生還し海部の二壘を襲ひ藤井之を取り損るや石渡生還藤崎三壘を突き倒るや和智出で、二壘の虚を突き海部生還し渡邊二壘に打ちて死し高中軍奮然として代りしも海部の魔球愈々甚だしく野田三振するや藤井決死して出で右翼に安全球を打ち飯塚三振せしも捕手のエラーにより一壘を踏むや得たりと藤井三壘に突進せしも捕手に刺さる大島三振又挽回の力なし。第九回高中軍これを最後と力戦し谷先づ三振三本飛球を打上げて捕手に得られ石渡出づるや二壘オガールの安全球を打ち秋本出で、又三壘オガールの安全球を飛ばし石渡生還野村投手に小飛球を呈してやむ。堀田三振し山本投手を突き死し小池最後に三振して十一對一にて本校の大勝に歸す。高中軍勉めたりと雖も未だ中學のチーム我が壘を摩するに足らず。只二壘手藤井の打撃に守備に頗る齊輩を抜けると投手の魔球見る可きとは共に高中軍の珍とする處充分の練習を経て優秀なるチームたるを得む。経過左の如し

高 中	壘 手	投 手	捕 手	右 中	左 中	右 一	左 一	右 外	左 外	野 手
藤井	飯塚	大塚	山本	小宮	丸野	田				
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
安全球	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
四球及	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
死球	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三振	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0
打撃數	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3
中二捕遊三左右一投	堅壘手	擊壘翼	翼壘手							
本 校	藤智	邊谷	本渡	本村	海					
得 点	0	3	0	2	1	2	0	2	0	1
安全球	0	0	1	2	0	2	0	0	0	0
四球及	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0
死 球	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三 振	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0
打撃數	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4
(谷)セーフヒット	ホームラン	セツト	二	三	石渡	二	渡邊	二		
									49	3
									3	3
									5	11
									32	12
									1	1
									1	1

一中と本校との試合

十六日大會最後の試合として舉行さる。遂に十三對零にてシャットアウトの憂目を一中軍の見しこん憐れなる、インニング左の如し

第 一 回	第 二 回	第 三 回	第 四 回	第 五 回	第 六 回	第 七 回	第 八 回	第 九 回
一 中	0	0	0	0	0	0	0	0
本 校	0	0	0	3	2	8	0	0

13×A0

午後二時半より本校選手藤崎君審判の下に一中軍より先づ攻勢を取る。第一回より第三回まで双方得る處なし。唯一中軍既海保のスロー魔球に殺弄さるゝもの四。第四回藤村バンドを過りて死し竹村原又三振。本校軍今や戦機近けりとも谷安全球を右翼と中堅の間に飛ばし二壘を陥る外野よりの投球悪く瞬間に三壘に至る三本三壘

を突き其の失に乗じ谷生還す、海保四球を利し關口三振し三本際に乗じて三壘を突き捕手周章投球を過り三本生還石渡投手を熱球にて抜き海保生還野村三振して第五回に移る越田三振し小泉投手に小飛球を呈し辻左翼を突き一壘を踏みしも投手機微の妙腕により一壘に倒る。和智四球渡邊バンドに出で谷投手を突きや機に敏なる和智直に本壘を突き投手本壘への投球を過り突嗟生還三本右翼に飛球を送り死せしも其間に渡邊(七)生還海部投手を突き倒る一中軍漸色めさ立つ。第六回齋田遊撃を突き死し小川死球にて幸に一壘を得しも二壘に冒險を企て、捕手に刺され齋田(兄)三振意氣又振はず。關口遊撃を突き石渡又遊撃を襲ひ野村バンドに出で一壘に倒れしも關口を三壘に送る和智二壘の失に出で關口生還渡邊のバンドに石渡生還し一中軍混亂す渡邊(儀)遊撃を突き谷右翼に飛球を呈し死せしも三

三、意 思

余は今純粹經驗の立脚地より意思の性質を論じ、知と意との關係を明にせうと思ふ、意思は多くの場合、於て動作を目的とし又之を伴ふのであるが、意思は精神現象であつて外界の動作とは自別物である。動作は必ずしも意思の要件ではない。或外界の事情のため動作が起らなかつたとしても、意思は意思であつたのである。心理學者のいふ様に我々が運動を意思するには、過去の記憶を想起すれば足るのである、即ち之に注意を向けざればよいのである。運動は自ら之に伴ふのである、而して運動其者も運動感覺の連續にすぎない。凡て意思の目的といふ者も、直接に之を見れば、やはり意識内の事實である、我々はいつても自己の状態を意思するのである。意思に内外の區別はないのである。

意思といへば何か特別な能力がある様であるが、その實は一の心像より他の心像に移る推移の經驗にすぎない。或事を意思するといふのは即ち之に注意を向けることである。この事は最明に所謂無意的行爲の如き者に於て見ることが出来る。前にいつた知覺の連續のやうな場合には注意の推移と意思の進行とが全く一致するのである。勿論注意の状態は意思の場合にかぎつた譯ではない、その範圍が廣いやうであるが、普通に意思といふのは運動表象の体系に對する注意の状態である、換言すれば此の体系が意識を占領し、我々が之に純一となつた場合をいふのである。或は單に表象に注意するの之を意思の目的とし見るを違ふやうに思ふでもあらうが、そはその表

象の屬する体系の差異である。凡て意識は体系的であつて、表象も決して孤獨では起らない、必ず何かの体系に屬して居る。同一の表象であつても、その屬する体系に由りて、知識的對象ともなり又意思の目的となるのである。例へば、一杯の水を想起するにしても、單に外界の事情と聯想する時は知識的對象であるが、自己の運動と聯想せられた時は意思の目的となるのである。詩人が欲せざる天の星は美しといった様に、いかなる者も自己の運動表象の系統に入り來らざる者は意思の目的とはならぬのである。我々の欲求は凡て過去の經驗の想起に因りて成立することは明なる事實である。その特徴たる強き感情や緊張の感覺も前者は運動表象の体系は多く生活本能に本づくのと後者は運動に伴ふ筋覺に外ならぬのである。又單に運動を想起するのみでは之を意思といふことはできぬ様であるが、それは未だ運動表象が全意識を占領せぬが故である、眞に之に純一となれば直に意思の決行となるのである。

然らば運動表象の体系と知識表象の体系といかなる差異があるであらうか。意識發達の始に遡りて見るとかくの如き區別があるのではない。我々の有機体は元來生命保存の爲に種々の運動をなす様に作られて居る。意識はかくの如き本能的動作に副ふて發生するので、知覺的なるよりも寧衝動的なるのがその原始的状態である。然るに經驗の積むに従ひ種々の聯想ができるので、遂に知覺中樞を本とするのと運動中樞を本とするのと兩種の体系ができるやうになる。併しいかに兩体系が分化したといつても、全然別種の者となるのではない。純知識であつても何處かに實踐的意味を持つて居り、純意思であつても何等かの知識に本づいて居る。具象的精神現象は必ず兩方

面を具へて居る、知識と意思とは同一現象をその著しき方面に由りて區別したのにすぎぬのである。それで知覺は一種の衝動的意思であり、意思は一種の想起である。加之記憶表象の純知識的なる者あつても、必ず多少の實踐的意味を持つて居らぬことはない、之に反し偶然に起るやうに思はれる意思であつても、何かの刺激に本づいて居るのである。又意思は多く内より目的を以て進行するといふが、知覺でもあつても豫め目的を定めて之に感官を向けることもできる、特に思惟の如きは尽く有意的であるといつてよい。之に反し衝動的意思の如き者は全く受働的である。右の如く考へて見ると、運動表象と知識表象とは全く類を異にせるものではなく、意思と知識との區別も單に相對的であるといはねばならぬやうになる。意思の特徴である苦樂の情、緊張の感も、その程度は弱くとも、知的作用にも必ず伴ふて居る。知識も主觀的に見れば、内面的潛勢力の發展とも見ることができぬ。嘗ていつた様に、意思も知識も潜在的或者の体系的發展と見做すことができるのである。勿論主觀と客觀とを分けて考へて見れば、知識に於ては我々は主觀を客觀に従へるが、意思に於ては客觀を主觀に従へるといふ區別もあるであらう。これには主客の性質及關係を論ずる必要もあるであらうが、余は此点に於ても知と意との間に共通の点があるであらうと思ふ。知識的作用に於て我々は豫め一の假定を抱きて之を事實に照らして見るのである、いかに經驗的研究であつても必ず先づ假定を持つて居なければならぬ、而して此の假定が所謂客觀と一致する時、之を眞理と信するのである、即ち眞理を知り得たのである。意思的動作に於ても我は一の欲求を持つて居ても、直に之が意思の決行となるのではない、之を客觀的事實に鑒み、

その適當にして可能なるを知つた時、始めて實行に移るのである。前者に於て我々は全然主觀を客觀に従へるが、後者に於ては客觀を主觀に従へるといふことができるであらうか。欲求は能く客觀と一致することに因りてのみ實現することができ、意思是客觀より遠ざかれば遠ざかる程無力となり、之に近づけば近づく程有力となるのである。我々が現實と離れた高き目的を實行せうと思ふ場合には種々の手段を考へ、之に因りて一步一步に進まねばならぬ。而してかく手段を考へるのは即ち客觀に調和を求めるのである、之に従ふのである。若し到底その手段を見出すことができぬならば目的其者を變更するより外はなからう。之に反し目的が極めて現實に近かつた時には、飲食起臥の習慣的行爲の如く、欲求は直に實行となるのである。かゝる場合には主觀より働くのではなく、反つて客觀より働くとも見らるゝのである。

かく意思に於て全然客觀を主觀に従へるといへないやうに、知識に於て主觀を客觀に従へるとはいはれぬ。若し客觀的事實が全く主觀に反する者ならば我々は之を知ることができぬ。之を知るといふことは之を主觀化することである。近來「プラグマチスト」などのいふやうに、我々の知識的作用の本には意思の作用が本となつて居る。同一物に就いての知識であつても人に由りて異なるのは之が爲である。知識發展の裡面には意思の發展がある。純粹經驗の立脚地より見れば、主觀を離れた客觀といふ者はない、眞理とは我々の經驗的事實を統一した者である、即ち最有力にして統括的なる表象の体系にすぎない。眞理を知るとか之に従ふとかいふのは自己の經驗を統一するの謂である、小なる統一より大なる統一にすゝむのである。而して我々の眞正なる自己は

統一作用其者であるとするれば、眞理を知るといふのは大なる自己に従ふのである、大なる自己の實現である。知識の深遠になると共に自己の活動が大くなる、之まで非自己であつた考も自己の体系の中に入つてくることになる。我々はいつでも個人的要求を中心として考へるから、知識に於て所働的であるやうに感ぜられるのであるが、若その中心を變して之を所謂理性的要求に置くならば、我々は知識に於て能動的である。

我々は常に過去の運動表象の喚起に由りて自由に身体を動かし得ると信じて居る。併し我々の身体も物体である、此点より見ては他の物体と變りはない。視覺にて外物の變化を知るのも、筋覺にて自己の身体の運動を感じるのも同一である、外界といへは兩者共に外界である。然るに何故に他物とは違つて、自己の身体だけは自由に支配することができると考へられるのであらうか。我々は運動表象をば一方に於て我々の心像であると共に、一方に於て外界の運動を起す原因となる考へて居る。併し純粹經驗の立脚地より見れば運動表象に由りて身体の運動を起すといふも、或豫期的運動表象に直に運動感覺を伴ふにすぎない。此点に於ては凡て豫期せられ外界の變化が實現せられるのと同じである。實際原始的意識の状態では内外の運動は同一であつたであらうと思ふ。唯經驗の進むにつれて此の二者が分化したのである。即ち種々なる約束の下に起る者が外界の變化と見られ、豫期的表象にすぐに従ふ者が自己の運動と考へられるやうになつたのである。固より此の區別は絶対的でないのであるから、自己の運動であつても少しく複雑なる者はすぐに豫期的表象に直に従ふことはできぬ。此の場合に於ては、意思の作用は著しく知識の作用に近づ

いてくるのである。要するに、外界の變化といつて居る者もその實は我々の意識界即純粹經驗内の變化であり、又約束の有無といふことも比較的であるとすれば、知識的實現と意思的實現とは畢竟同一性質の者となつてくる。或は意思的運動に於ては豫期的表象其者が直に運動の原因となるのであるが、外界の變化に於ては知識的なる豫期表象其者が變化の原因となるのではないといふかも知れぬが、若し意識を離れて全然獨立の外界なる者があるとすれば、意思に於ても意識的なる豫期表象が直に外界に於ける運動の原因とはいはれまい、單に兩現象が平行するといふまででなければならぬ。かく見れば知識的豫期表象の外界に對すると同一關係となる。實際、意思的豫期表象と身体の運動とは必ず相伴ふのではない、やはり或約束の下に伴ふのである。

又我々は普通に意思は自由であるといつて居る。併し所謂自由とはいかなることをいふのであらうか。元來欲求は我々に與へられた者であつて、自由に之を生ずることはできない。唯或與へられたる最深の動機に従ふて働いた時には自己が能働であつて自由であつたと感ぜられるのである。之に反しかゝる動機に反して働いた時は強迫を感じるのである。これが自由の眞意義である。而して此の意味に於ての自由は單に意識の体系的發展と同意義であつて、知識に於ても同一の場合には自由であるといふことができる。我々はいかなることにても自由に欲することができるやうに思ふが、それは單に可能であるといふのである。實際の欲求は其時に與へられるのである、或一の動機が發展する場合の外は之を豫知することもできぬ。我が欲求を生ずるといふよりは現實の動機が即我である。普通には欲求の外に超然たる自己があつて自由に動機を決定するやうにいふ

が、かくの如き神秘力のないのはいふまでもなく、かゝる場合には偶然の決定であつて自由の決定とは思はれぬのである。

上來論し來つた様に、意思と知識との間には絶對的區別のあるのではなく、その所謂區別とは多く外より與へられた獨斷にすぎないのである。純粹經驗の事實としては意思と知識との區別はない、共に一般的或者が体系的に自己を實現する過程であつて、その統一の極致が眞理であり兼ねて又實行であるのである。嘗ていつた知覺の連續のやうな場合は、未だ知と意と分れて居らぬ、眞に知即行である。唯意識發展につれて、一方より見れば種々なる体系の衝突の爲、一方より見れば更に大なる統一に進む爲、理想と事實との區別ができ、主觀界と客觀界とが分れてくる。そこで主より客にゆくのが意で、客より主にきたるのが知とであるといふやう考が出てくる。知と意との區別は主觀と客觀とが離れ、純粹經驗の統一せる状態を失つた場合に生ずるのである。意思に於ける欲求も知識に於ける思想も共に理想が事實と離れた不統一の状態である。思想といふのも我々が客觀的事實に對する一種の要求である、所謂眞理とは事實に合ふた實現し得べき思想といふことであらう、此点より見れば事實に合ふた實現し得べき欲求と同一といつてよい、唯前者は一般的で後者は個人的なるの差があるのである。それで意思の實現とか眞理の極致といふのは此の不統一の状態から純粹經驗の統一の状態に達するのである。意思の實現をかく考へるのは明であるが、眞理をかく考へるには多少の説明を要するであらう。如何なる者が眞理であるかといふに就いては種々の議論もあるであらうが、余は最も具体的なる經驗の事實に近い者が眞

理であると思ふ。往々真理は一般的であるといふ、併しその意味が單に抽象的共通といふことであれば、かゝる者は反つて真理と遠ざかつたものである。真理の極致は種々の方面を綜合する直接の事實其者でなければならぬ。此の事實が凡ての真理の本であつて、所謂真理とは之より抽象せられ、構成せられた者がある。或は真理は統一にあるといふが、その統一とは抽象概念の統一をいふのではない、眞の統一は此の直接の事實にあるのである、それで完全なる真理は個人的であり、現實的である、完全なる真理は言語に云ひ現はすべき者ではない。所謂科學的真理の如きは完全なる真理とはいへないのである。

凡て真理の標準は外にあるのではなく、反つて我々の純粹經驗の状態にあるのである、真理を知るといふのはこの状態に一致するのである。數學などの様な抽象的學問といはれる者でも、その基礎たる原理は我々の直覺即ち直接經驗にあるのである。經驗には種々の階級がある、數學的直覺の如き者も一種の經驗である。種々の直接經驗があるならば、何に由りて其眞偽を定むるかの疑も起るであらうが、それは二つの經驗が第三の經驗の中に包容せられた時、此の經驗に由りて之を決することができる。兎に角直接經驗の状態に於て、主客相没し、天地唯一の現實、疑はんと欲して疑ふ能はざる處に真理の確信があるのである。一方に於て意思の活動といふことを考へて見ると、やはり此の如き直接經驗の現前即ち意識統一の成立をいふにすぎぬ。一の欲求の現前は單に表象の現前と同じく直接經驗の事實である。種々の欲求の争の後一つの決斷ができたのは、判斷の場合に於ての様に、一の内面的統一が成立したのである。意思が外界に實現されたといふ

時は實驗の場合の様に主客の別を打破した最も統一せる直接經驗の現前したのである。或は意識内の統一は自由であるが、外界との統一は自然に従はねばならぬといふが、内界の統一であつても自由ではない、統一は凡て我々與へられたる者である。純粹經驗より見れば内外などの區別も相對的である。意思の活動とは單に希望の状態ではない、希望は意識不統一の状態であつて、反つて意思が妨げられた場合である。唯意識統一が意思活動の状態である。たとひ現實が自己の眞實の希望に反して居ても、現實に満足し之に統一なる時は、現實が意思の實現である。之に反し、かに完全なる境遇であつても、他に種々の希望があつて、現實が不統一の状態であつた時には、意思が妨げられて居るのである。意思の活動と否とは統一と不統一即ち統一と不統一に關するのである。

例へば此處に一本のペンがある。之を見た瞬間は、知といふこともなく、意といふこともなく、唯一個の現實である。之に就いて種々の聯想が起り、意識の中心が推移し、前の意識が對象視せられた時、前意識は單に知識的となる。之に反し此のペンは文字を書すべき者だといふやうな聯想が起る。此の聯想が尙前意識の「フリンジ」として之に附屬して居る時は知識的であるが、此の聯想的意識其者が獨立に傾く時は、即ち意識中心が之に移らうとした時は欲求の状態となる。而して愈獨立の現實となつた時が意思の實現であり、兼ねて又眞に之を知つたといふのである。何でも現實に於ける意識体系の發展する状態を意思の作用といふのである。思惟の場合でも或問題に注意を集中して之が解決を求むる所は意思である。之に反し茶をのみ酒をのみといふ様なこ

とでも、之だけならば意思があるが、その味をためすといふ意識が主とならば知識となる、而してこのためすといふ意識其者が此の場合に於て意思である。意思といふのは普通の所謂知識よりも一層根本なる意識体系であつて統一の中心となる者である。知と意との區別は意識の内容にあるのではなくその体系的地位に由りて定まつてくるのであると思ふ。

理性と欲求とは一見相衝突するやうであるが、其實は兩者同一の性質を有し、唯大小深淺の差あるのみであると思ふ。我々が理性の要求といつて居る者は更に大なる統一の要求である、即ち個人を超越せる一般的意識体系の要求であつて、反つて大なる超個人的意思の發現とも見る事ができる。意識の範圍は決して所謂個人の中に限ぎられて居らぬ、個人とは意識の中の一小体系にすぎない。我々は普通に肉体生存を核とせる小体系を中心として居るが、若し更に大なる意識体系を中軸として考へて見れば、此の大なる体系が自己であり、その發展が自己の意思實現である。例へば熱心なる宗教家、學者、美術家の如き者である。かくなければならぬといふ理性の法則と單に余はかく欲するといふ意思の傾向とは全く相異なつて見ゆるが、深く考へて見ると其根底を同ふする者であると思ふ。凡て理性の法則といつて居る者の根本には意思の統一作用が働いて居る。シラーなどが論じて居る様に公理といふやうな者でも元實用上より發達した者であつて、その發生の方法に於て單なる我々の希望と異なつて居らぬ。翻つて我々の意思の傾向を見るに、無法則のやうであるが、自ら必然の法則に支配せられて居るのである。右の二者は共に意識体系の發展の法則であつて、唯その効力の範圍を異にするのみである。或は意思は盲目であるといふので

理性と區別するが、何でも我々に直接の事實である者は説明はできぬ。理性であつても其根本である直覺的原理の説明はできぬ。説明とは一の体系の中に他を包容し得るの謂である。統一の中軸となる者は説明はできぬ、兎に角其場合には盲目である。

四、知識的直覺

余が此處に知識的直覺といふのは所謂理想的なる、普通に經驗以上といつて居る者の直覺である、辨證的に知るべき者を直覺するのである、例へば美術家や宗教家の直覺の如き者をいふのである。直覺といふ点に於ては普通の知覺と同一であるが、其内容に於ては遙に之より豊富深遠なる者である。

知識的直覺といふことは或人には一種の神秘的能力の様に思はれ、或人には全く理想のやうに思はれて居る。併し余は之と普通の知覺とは同一種であつて、其間にはつきりした分界線をひくことは困難であらうと考へる。普通の知覺であつても、前にいつた様に、決して單純ではない必ず構成的である、理想的要素を含んで居る。余が現在に見て居る者は現在の儘を見て居るのではなく、過去の經驗の力に由りて説明に見て居るのである。此の理想的要素は外より加へられた聯想でなく、知覺其者を構成する要素である、知覺其者が之に由りて變化せられるのである。この直覺の根底に潜める理想的要素は何處までも豊富、深遠なることができる。各人の天賦により、又同一の人でもその經驗の進歩に由りて異なつてくるのである。始は經驗のできなかったこと又は

漸く辨證的に知り得たことも經驗の進むに従ひ直覺的事實とし現はれてくる、この範圍は自己の現在の經驗を標準として限定することはできぬ。或人の超凡的直覺が單に空想であるか、將眞實在の直覺であるかは他との關係に由つて定つてくる。直接經驗より見れば空想も眞の直覺も同一の性質をもつて居る、唯其統一の範圍に於て大小の別あるのである。

或人は知識的直覺がその時間、空間、個人を超越し、實在の眞相を直視する点に於て普通の知覺と其類を異にするかと考へて居る。併し前にもいつた様に、嚴密なる純粹經驗の立場より見れば、經驗は時間、空間、個人等の形式せられるのではなく、此等の差別は反つて此等を超越せる直覺に由りて成立するのである。又實在を直視するといふも、凡て直接經驗の状態に於ては主客の區別はないのである、獨り知識的直覺の場合にかぎつた譯ではない。主客の別は經驗の統一を失つた場合に起る相對的形式である、之を互に獨立せる實在と見做すのは獨斷にすぎないのである。

シヨーペンハウエルの意思なき純粹直覺といふ者も、天才の特殊なる能力でない、反つて我々の最も自然にして統一せる意識状態である。天真爛漫なる嬰兒の直覺は凡て此種に屬するのである。それで、知識的直覺とは我々の純粹經驗の状態を深く大きくした者にすぎない、即ち意識体系の發展上に於ける大なる統一の發現をいふのである。學者の新思想を得るのも、道德家の新動機を得るのも、美術家の新理想を得るのも、宗教家の新覺醒を得るのも總てかゝる統一の發現に基づくのである。我々の意識が單に感官的性質の者ならば、普通の知覺的直覺の状態に止まるであらう、併し理想的なる精神は無限の統一を求め、而してこの統一は所謂知識的直覺の形に於て

與へられたるのである。知識的直覺とは知覺と同じく意識の最も統一せる状態である。

普通の知覺が單に受働的と考へられて居る様に、知識的直覺も亦單に受働的觀照の状態と考へられて居る。併し眞の知識的直覺とは純粹經驗に於ける統一作用其者である、生命の捕捉である。即ち技術の骨の如き者、或は進んで美術の精神の如き者がそれである。例へば畫家の興來り筆自ら動くが様に、複雑なる作用の背後に統一的或者が働いて居る。その變化は無意義の變化でない、一つの者の發展完成である。此の二者の會得が知識的直覺であつて、而もかゝる直覺は獨り高尚なる藝術の場合のみではなく、凡て我々の熟練せる行動に於て見る所の極めて普通の現象である。普通の心理學からは單に習慣であるとか、有機的作用であるとかいふであらうが、純粹經驗の立場より見れば、これは實に主客合一、知意融合の状態である。物我相忘し、物が我を動かすのでもなく、我が物を動かすのでもない、唯一の世界、一の光景あるのみである。知識的直覺といへば主觀的作用の様に聞ゆるのであるが、その實は主客を超越した状態である、主客の對立は寧ろ此の統一に由りて成立するといつてよい、藝術の神來の如き皆此境に達するのである。又知識的直覺とは事實を離れたる抽象的一般性の直覺をいふのではない。畫の精神は描かれたる個々の事物と異なれども、又之を離れてあるのではない。嘗ていつた様に、眞の一般と個性とは相反する者でない、個性的限定に由りて反つて眞の一般を現はすことができる。藝術家の精巧なる一刀一筆は全体の眞意を現はすが爲である。

知識的直覺を右の如く考へたならば、思惟の根底には知識的直覺なる者の横はつて居ることは明

である。思惟は一種の体系である、体系の根底には統一の直覺がなければならぬ。之を小にしては、ゼームスが意識の流に於ていつて居る様に、骨牌の一束が机上にあるといふ意識に於て、主語が意識せられた時客語が暗に含まれて居り、客語が意識せられた時主語が暗に含まれて居る、つまり根底に一つの直覺が働いて居るのである。心理的に此者は技術の骨と同一性質の者である。又之を大にしては、プラト、スピノーザの哲學の如き凡て偉大なる思想の背後には大なる直覺が働いて居るのである。天才の直覺といふも、普通の思惟といふも唯量に於て異なるので、實に於て異なるのではない。前者は新なる深遠なる統一の直覺にすぎないのである。凡て關係の本には直覺がある、關係は之に由りて成立するのである、我々がいかに縦横に思想を馳せるとも、根本的直覺を超出することはできぬ。思想は此上に成立するのである。思想は何處までも説明のできる者ではない、その根底には説明し得べからざる直覺がある、凡ての説明は此上に築き上げられるのである。思想の根底にはいつても神秘的或者が潜んで居るのである、幾何學の公理の如き者すらこの一種である。往々思想は説明ができるが、直覺は説明ができぬといふが、説明といふのは更に根本的なる直覺に攝歸し得るといふ意味にすぎないのである。此の思想の根本的直覺なる者は一方に於て説明の根底となると同時に、一方に於て思惟の力となる者である。

思惟の根底に知識的直覺がある様に、意思の根底にも知識的直覺がある。我々が或事を意思するといふのは主客合一の状態を直覺するので、意思は此の直覺に由りて成立するのである。意思の進行とは此の直覺的統一の發展完成であつて、其根底には始終此の直覺が働いて居る、而してそ

の完成した所が意思の實現となるのである。我々か意思に於て自己が活動すると思ふのはこの直覺あるの故である。自己といつて別にあるのではない、眞の自己とはこの統一の直覺をいふのである。それで古人も終日なして而も行せずといふことか、若し此の直覺より見れば、動中に靜あり、爲して而もなさずといふことかできる。又かく知と意とを超越し、而もこの二者の根本となる直覺に於て、知と意との合一を見出すこともできる。

眞の宗教的覺悟とは思惟に本づける抽象的知識でもない、又單に盲目的感情でもない、知識及び意思の根底に横はれる深遠なる統一を自得するのである、即ち一種の知識的直覺である、深き生命の捕捉である。故にいかなる論理の及も之に向ふことはできず、いかなる欲求も之を動かすことはできぬ、凡ての眞理及び満足の本となるのである。その形は種々あるべけれど、凡ての宗教の本には此の根本的直覺がなければならぬと思ふ。

(未完)

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十一年六月二十日印刷
明治四十一年六月二十四日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

